
ヒーローズ・エンブレム

礎衣 織姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒーローズ・エンブレム

【Nコード】

N5395U

【作者名】

礎衣 織姫

【あらすじ】

容姿も頭も平均的な、フツメン河波斗一^{かわなみといち}。生まれ育った街も平凡だったが、そこには宿敵とも思える、顔よし、スタイルよし、頭よしの完璧な三人組、佐藤海地^{さとうかいじ}、真部李幸^{まなべりこう}、坂本里奈^{さかもとりな}がいた。街のスーパースターである三人組に睨まれたら最後という、常識では考えられない街の風習に立ち向かう斗一だったが……

ゆいいつの味方かも知れないイケメン桜井享^{さくらいじょう}も、大学進学のために上京。四面楚歌となった彼の春休みには、なにやら「普通じゃない」、「不穏な空気が流れはじめていた。

春休みは危険の幕開け（前書き）

三人称をおもな文体として好む作者が、無謀にも挑戦する一人称です。なので、一人称として扱いやすそうなストーリーを題材としています。とにかく自信がないので、まさかの頓挫も……迷惑千万なのは承知のうえで投稿を決行。あらかじめご了承ください。*更新も遅いです。ご注意ください。

春休みは危険の幕開け

「地味だけど、それなりにはイケてるんじゃない？」と言ってくれるのは母親だけ。彼女いない暦は年の数という、なんの取り柄もない男、河波斗一かわなみといちとは俺のことだ。

平均的な顔で身長一七八センチ。運動神経は並。成績は真ん中ぐらいで、人からの印象は……特にないだろう。父親は中小企業サラリーマンで、母親はパートタイマー。兄弟はいない。資格もない。貯金は二万五千円。

このたび、平凡な高校生から平凡な大学生へと転身を遂げるわけだが、それがどうした。極めて何事もない春休みだ。現在住んでいるところは都会ではないが、それほど田舎でもない市で、よくある街だ。そして平凡な俺には、非凡に片足突っ込んだ友人がいる。桜井さくらいだ。

美形で、身長一八〇センチ。運動神経は抜群で成績も上位。人からの印象はカッコイイ&王子様だ。父親が社長で母親は専業主婦、それにカワイイ妹が一人いる。資格は十個くらい持っているそうで、貯金までは知らないが、金回りはいい。

イケメン桜井とは、高校で知り合った。俺のような人間とつるもつというのだから、かなりの変わり者である。己を引き立てるためだとしても、変人だ。なぜそう思うかについては、後ほど語るとして。

桜井はノートを貸してくれたり、昼飯をおごってくれたり、なかなか役に立つ男だった。しかも「週末には女の子とカラオケ」なんていう特典までついてくるので、右に並ぶ者はない友達といえる。

「おまえ、大学どこ行くの？」

桜井は急に、思い出したように質問をしてきた。卒業式の日の午後である。卒業証書を片手に、うららかな日差しの中、校庭を歩いていた時のことだ。

「地元が決まっただらう」

と俺は答える。「フーが知らなかったのかよ、友達じゃないのか」と付け加えそうになるも、俺もヤツの行き先を知らなかったので、言葉を飲み込んだ。

「よかったな、中くらいの頭でも入れる大学があつて」

桜井はのんきに言った。ちよつとグサツときたが、本気でバカにしていないのはわかる。ゆえに俺は、頬を引きつらせながら、笑つて答えた。

「悪かったな、能無し大学で。そういう、おまえはどこだよ」

「T大」

アツサリ答えられたが、日本を代表すると言つても過言じゃない某有名大学だ。俺は一瞬だけ理解できずにポカンとした。

「え？ ひよつとして合格した？」

「あたりまえだろ」

なにが、あたりまえなものかよ。しかし……T大か。

「そつかあ、上京するんだな」

思わずしんみりしてしまった。そのせいか桜井も、しんみりとなつた。

「うん。逢えなくなるけど、ずっと友達でいてくれよな」

青春ドラマや少年向けアニメなどで、よく吐かれる台詞だ。テレビではジーンとくるのだが、現実で言われると恥ずかしさいっぱいになるのは、なぜだろう。

きつと前置きに熱い友情エピソードがないせいだな。ここで「なに言っただよ！俺とおまえは死ぬまで友達さ！」とは返せない。唐突に盛り上がりすぎだし、クサすぎる。

よって俺は、しどろもどろに応えた。

「う、あ、まあ、いいけど」

「なんだよ」

「なんかムズがゆい」

「そう言うなって。考えてみたら俺、おまえしか友達いないんだ」

「うえっ、嘘っ」

「ホント。ガールフレンドはいっぱいいるけど、男友達いなかった」
「充分じゃねえか。野郎フレンドなんか、ちよっといりゃいいんだよ。」

そう思いつつも、俺は「女に囲まれてっからだ」と冗談半分に返してみた。すると桜井は「そうだな」とすんなり肯定した。

くっそー、ムカつく。

「あのさ」

「あ?」

「これ、住所とケータイ番号。ケータイ新しいのに変えるんだ。メアドも変わるから、よろしく」

メモ用紙を渡された。

本気で友達いないのか。常々うらやましいヤツだと思っていたけど、急に哀れに思えてきた。おまえの気持ちはよくわかるぞ。そう、友達なら俺もいない。それは胸張って言える！

「ちゃんとメール返信すつから」

とか言ってみる。そこで突然、門前で女子団に前方をふさがれた。ざっと数えて九人ほどいる。

「桜井くーん！ いまから打ち上げするんだけど、一緒に行かない?」

「きゃあ、言っちゃった!」

「キヤーキヤー」

「キヤーキヤー」

キヤーキヤーうるせえよ、女子！俺も誘え！

そんなことを思っていると、桜井がチラッと俺の顔色をうかがった。

「斗ーも一緒にいいなら」

ナイス！ ナイスフォローだ桜井！あとは女子が嫌な顔をしませんようにと祈るだけ。まあ、たいていはOKだろう。さきほどの台詞から、乙女たちは「桜井君は斗一と一緒にでないなら行かない」と解釈したはず。これでいつも八割がた同行していた俺だ。いまさら却下はないだろう。

案の定、返事はこう返ってきた。

「いゝよゝゝ！ もっちろーん！」

やった！ それみる！ ……あ、でも金がない。

心配する俺をよそに、桜井はひょうひょうとしている。「さては持つてるな。あとで必ず返すから貸してくれ」と相談しようとした俺の気持ちもなおざりに、このあと桜井が吐いた台詞で、俺は心底冷えた。

「そつちが誘ったんだから、オゴリだよな？」

ぎえゝつ、割り勘だろ！ 割り勘！ それともアメリカンなのか！？ いくらおまえでも、それはブーイングだろ！

ところが女子団は、キャピキャピしながら盛り上がった。

「あたりまえじゃーん！ つきあってくれるなら私たちが出すよ！」

桜井、おまえは神か。俺が言ったら絶対に袋叩きだぞ。「けつ、誘ってやってんじゃんよ！」と言い返されること請け合いだ。

唾然としていると、桜井が俺の腕をつかんで引っ張った。

「ラッキーだったな。行こうぜ？」

男から見ても、さわやか好青年。

桜井よ、女友達がこれだけいれば、男友達はいらんぜよ。

そんな桜井も、春休み突入とともに上京した。今は部屋を片付けるので忙しいらしく、電話もメールもない。いや、一回だけ電話があった。周囲の喧噪？が受話器に入るので聞いてみれば、「女の子達が荷物開けるの手伝いに来てくれた」とのこと。

おいおい、もう女子に囲まれてるのかよ。
俺はバカらしくなって電話を切った。
「ヒマだなあ〜。歩いてくつか」

というわけで、近所をブラついた。住宅が並ぶ通りを大通りに向かってまっすぐだ。大通りへ出ると道路をはさんだ向こうにコンビニがある。自販機でジュースでも買って飲むか、とジーンズのポケットを探る。百五十円。

よっしゃ、買える。

小学生のように百五十円を握り締め、信号が変わるのを待っていると、なんか見たことのある三人組がコンビニから出てきた。

佐藤海地、真部李幸、坂本里奈。

佐藤と真部は男で、里奈は女だ。幼稚園から中学校まで一緒だったが、それほど接点はない。なにしろこのトリオは最強。子供の頃から目立ちまくっていた。つまり俺とは正反対の人種だ。

佐藤は身長一八三センチのスポーツマンで、ごっついハンサム。真部は理数系のクールビューティー。里奈は超美少女。性格もハナマルで、強く優しく、たくましく、品のある連中である。幼少のみぎりからその傾向があり、「住む世界が違う」と、みんなにもてはやされ、芸能人でもないのに芸能人あつかいだ。今も周囲の視線を集め、キラキラとオーラを放っている。

同じ土地で生まれ育ったとは思えん。

俺はうなだれつつ、青信号に変わったのを機に横断歩道を渡った。キラキラなヤツらともすれ違ったが、もちろん俺には目もくれない。華やかに、さわやかに微笑みながら、春の日差しの中を歩いて過ぎる。俺は極力、連中を見ないようにした。

注目などしてやるか。おまえたちに興味なんかない??

ミジンコ並みの意地だった。本音は違う。興味津々だ。特に里奈とは話くらいしてみたい。あんな美少女はテレビにだって、そうそう出てくるもんじゃないからだ。

生まれつき色素が薄いらしく、肌は真っ白で、長い髪は茶色。瞳も薄い茶色だ。まつげは自然に長くてカールしている。ピンク色の唇に、ぱっちり二重。背は百六十センチと理想的なサイズ。手足の長さも充分で、華奢なのに胸はある。

まったくよく創られている。傑作だ。高嶺の花どころか天上の人だ。だからこそ優秀な男児が二人も付いて、ガードしているのだ。俺はそう思う。そう思って来た。この十八年。

なんにしても、気分がへこんだ。せつかくジュース一本買える奇跡が台無しである。おかげで思い出さたくないことまで思い出した。

あれは中学二年の秋。秋と言えば文化祭。体育祭もあるが、俺は文化祭にこだわりたい。なぜかというところ体育祭は、なんの選手にも選ばれないので、不参加同然だからだ。

母校の文化祭は、クジ引きで係が決まる。クラスの出し物に参加するか、実行委員にまわるかだ。もちろん楽なのはクラスの出し物なのだが、俺はクジ運がないので、あっさり実行委員になった。でもまあいい。実行委員といえば、バリバリ参加した感がある。たとえどんなにわずらわしい役目だろうと、実行委員の腕章をつけているだけで人に頼りにされるわけだから。……ただのパシリだという不届き者もいるが、そんなのは無視だ。

各クラスから二名ずつ選出された実行委員は一度、生徒会室に集まる。生徒会長？ それはもちろん真部李幸だ。副会長は佐藤海地、生徒会委員の一人には坂本里奈もいる。常につるんでいる、というか、自然に寄り固まる三人なのだ。

？この三人を間近に眺められるだけでも、実行委員になった甲斐があった？と考えたのは俺だけではない。ほかの実行委員も目を輝かせて、三人を順に食い入るように見つめている。特に男は里奈を、

女は真部と佐藤を。

「君たちが今年の実行委員だね。裏方で大変だけど、僕も全力でサポートするから、がんばってね」

全力でサポートとは謙虚な発言。サポートは実行委員のはずなのに、生徒会長殿は自分のほうがアシスタントだとおっしゃるか。いやあ、中身もよくできておりますな。

などと、俺がひとしきり感心していると、

「じゃあ、実行委員の名簿を作るから」

真部は机に向かってノートパソコンを開き、実行委員の顔を見ながら、名前を打ち込み始めた。彼が生徒会長たるゆえんはこれだ。数百人いる全校生徒の顔と名前を一致させて覚えているのだ。

どういう脳ミソしてるんだろっな？ 記憶力が脆弱な俺にはわからん。

ともかくも、名前をインプットされる前の者はドキドキしながら画面を見つめ、名前が打ち込まれると頬を紅潮させて顔をほころばせた。

どうして、そんな反応をするのかって？ 無論、理由はある。

彼ら三名のいずれかに顔と名前を覚えてもらうことが、わが街のステータスだからだ。念を押しておくが、校内ではない。「街」レベルでのステータスだ。覚えてもらうだけでレベル一から五十に上がってしまうくらいの威力がある。

彼らはスターだ。市長よりも偉く、芸能人よりも輝いている。存在自体が街の誇り。生まれただけで名誉市民。嘘のようで本当の話だ。

そんなわけで、俺もドキドキして待っていた。ところが??だ。

真部は俺の顔を見るなり、眉間を寄せて手を止めた。

「……えつと、ごめん。君、名前なんて言っただっけ？」

一瞬、室内が凍った。全校生徒の顔と名前を暗記しているはずの彼が、記憶していないなんてことは珍しい。佐藤も里奈も目を丸めている。だが彼らも、こっそり耳打ちできる情報を持ち合わせてい

なかった。つまり、あとの二人も俺を知らなかったのだ。

俺は羞恥に顔を真っ赤にしながら、少し押し殺した声で、

「河波斗一です」

と答えた。

ちなみに、このあとに続く実行委員の名前はつまりなくインプットされた。そう、校内でゆいいつ、俺だけが覚えてもらえていなかったのだ。よってレベルは一のままだ。

「まあ、最初はこんなもんだろう」と俺は自身を励ました。

一度顔を合わせて自己紹介したんだから、これからは大丈夫だ。

……いや、待てよ。俺っち、あの三人とは幼稚園から一緒だぞ？

小学校では何度もクラスが一緒だった。それで覚えてねーって、なに？ 実は覚えてるけど覚えてないふり？ 究極の嫌がらせなのか？ 俺、なにか嫌われるようなことしたか？

もんもんと記憶をめぐらす、思い当たる節がない。

否、えてして、したほうは覚えてないもんだ。きつと、なにかしたんだろう。しかし、これで許されるはずだ。なかなかシビアな仕返しを受けたからな。

だがそれ以降も、真部、佐藤、里奈の三名は俺を見るたび小首をかしげ、「誰だっけ？」と尋ねた。こんな執拗な嫌がらせを、さわやかで親切と評判の連中にされるとは、思ってもみないことだった。だから俺もヤツらを見かけるたびに、顔を合わせないよう姿をくりました。会いさえしなければ、嫌がらせを受けることもない。

とはいえ、この一件があつて以来、俺は中学を卒業するまで、全校生徒からシカトされた。別にヤツらに会わなくても、間接的に嫌がらせがあつたわけだ。しかし、こんなのは一過性のものだど気にしなかった。小中学生時代に一緒だった連中のほとんどは、社会に出るとまったく縁のない赤の他人となる。職場が一緒になることも希有だろう。そんな人間のことなんて気にしてもアホらしいじゃな

いか。

それでも苦痛だった約一年半を終え、高校へ進学した。が、人の噂は謙虚さのカケラもなく広まるもので……。所詮、市内にあるいくつかの中学から寄り集まった生徒らで構成される高校だ。俺が嫌われているらしいという噂は他校にもとどろいており、相当数の初対面人に無視された。最強トリオは有名な私立校で、俺は公立校。せめて学校が違うのだけは良かったが、このあとの三年間も地獄だろうと思うと、気がめいった。

ところが三人に文句を言いに行く気などは、サラサラなかった。どんな恨みを買ったかは不明だが、「知らないヤツ扱い」することで晴らせるというなら、晴らせばいいと思っていた。彼らは、俺にとっても憧れの存在だったのだ。だいたい文句なんて言いに行ったら、取り巻きにポツコポコだ。

そんな俺に声をかけてきたのが桜井だった。

「弁当、一緒に食わないか？ 女子に囲まれて良ければ」

「はい？」

最後のほう、もう一回言ってもらえませんかー。

「弁当、一緒にどう？ 俺、男一人ってツライんだよな。助けると思っ一緒にしてくれよ」

桜井は親指立てて、自分の肩越しにある集団を差した。先には十名近くの女子が机を固めて囲い、こちらの様子をつかっている。

「あそこで食べるのか？」

「うん、そう」

「なんでハーレム？」

「さあ？ なんか俺と一緒に食べたいんだって」

「食べてやりやいいじゃん」

「だから、もう一人くらい犠牲者が欲しいわけ」

「え？ 犠牲者なのか？ どうみても極楽浄土にしか見えねーぞ、

あそこ」

「じゃあ、一緒に食おうぜ?」

「でも俺、最強トリオにどっかで恨み買ってる男だぞ?」

「最強トリオ?」

「知らないのか? 真部、佐藤、里奈」

「知らない」

「なにっ!? おまえっ、この街の人間じゃねーな」

「ああ、県外から来たんだ。父親の仕事の都合で」

「なるほーどねー」。

しかし「この世にあの三人を知らない者は五万といる」という事実を無視し続けてきた街で生まれ育った俺には、驚愕だった。

「んじゃ、今日は一緒に食ってやるけど、その後の身のふり方は考えたほうがいいぜ?」

一応、忠告だけはしておく。

「どうして?」

「この街じゃ、あの三人に睨まれたら最後、犬以下の扱い受けるからだ」

桜井は眉をひそめて、苦笑した。

「ええ? そんなバカな話があるか? どんな権力者だよ。ヤクザ?」

「見目麗しい三人組。品行方正、頭脳明晰、弱者に優しく、強者も頭をたれるようなオーラを放ちまくってる。まるで神か天使のような存在だ」

「ハハッ、まつさかー?」

「ホントだって。実物見たら、よくわかる」

放課後、俺は半信半疑の桜井をともなって、連中の通う学校近くに身をひそめた。そして連中が門をくぐって出てくると、指し示した。

「あ、あいつらだ」

桜井はジツと観察しておいて、俺に向いた。

「なにをして睨まれてるって？」

「だーから、心当たりないんだって。とにかく俺のこと知らないの一点張りだ。幼稚園から一緒だぞ？　ありえねーだろ、いくら俺が影薄いつたって」

「……逆なんじゃないのか？」

「は？」

「いや、こっちのこと。それより、やっぱり俺には関係ないな。そもそも、この街の人間じゃないし。そんなルールにしたがう必要ない」

そう言つて桜井は、手を差し出した。

「これからもヨロシク」

俺は目を見開いて、おそろおそろ、その手を握った。「郷に入つては郷に従え」という言葉を知らんのか、そのうち身にしみる日が来るぞ、と思いつつ。

そんなわけで今に至る。ちなみに桜井の身には、なにもしみなかつた。おかげで高校生活は充実した。彼に好かれたい女子は、俺にも優しかったからだ。

そのイケメン救世主・桜井も東京へ行った。このさき地元の大学で俺を待ち受ける困難はなんだろーな、と思いつつ、自販機にコインを入れる。自販機はいい。あつという間に買えるし、店員に嫌な顔をされずにすむ。

コンビニ店員は地元民だ。最強トリオの味方だ。ゆえに俺のことを嫌悪している。「清算後回し」なんていう嫌がらせは日常茶飯事で、ペットボトル一本買うのに二時間待ちだ。

……なんという、住みにくい街だろう。大学卒業したら、俺も東京行こう。

そう考えて、出てきたコーラを取りつつ、ふり向いた。ヤンキーがいた。五人。なかなかオシャレなヤンキーだ。「芸能事務所に所属中ですか」と突っ込みたくなるヤンキーだ。

「あんた、河波斗一だろ」

「そーだけど？」

「自販機の使用料払えよ」

「は？」

「おまえはな、この街にいただけで犯罪なんだよ。この街にある物を使用するなんて、許せねえ」

なんつー無茶苦茶な。ここは無法地帯か。せつかくオシャレのセンスはあるのに、かつあげとは情けないな。

内心、嘆きつつ、

「三十円しか持ってねーけど」

とバカ正直に答えると、ヤンキーは舌打ちした。

「ちっ、しけたこと言ってんじゃねーよ。家から持って来い。三千円」

三千円！？　なんかちよつとリアルな金額だなあ。

俺は、あたりをチラチラとうかがった。通り過ぎる人々は、絡まれている俺が噂の男だとわかると、ほくそ笑んで見物を決め込んだ。つまり、ヤンキーの味方になった。

学校の連中も街の連中も、たいていはシカトで過ぎるというのに、今日は絡まれた。人生初。金のない連中の目にとまってしまったのが運の尽きなのだろう。

まいった。前例がないだけに、逃げ切り方がわからん。

「おら、持ってくるのか、来ねえのか！」

ヤンキーはスゴんで、襟首をつかんできた。俺より背え低いのに、なかなかがんばるな。じゃあ俺もがんばろう。

「んー、あれば持って来てもいいんだ、あればな。でも残念ながらない。大学に入学控えたガキのいる家に、金があるわけねー。高えぞ入学金」

「んだと！ 河波のくせに、生意気だぞ！」

わー、低俗な台詞。しかも生意気なこと、いつさい言ってるねーよ俺。金がないって生意気なのか？ 新発見。それにしても俺より低俗なヤツっているんだな。ふふふ。親近感わくぞ。

「なに笑ってるんだ！」

わわわ、顔に出たか。しまった。殴られるな、この展開。

俺は歯を食いしばった。その瞬間。ヤンキーの肩に、ポンと手を乗せた人物がいた。

「その人に手を上げるな」

「ああ？」

スゴみを利かせてヤンキーはふり返り、硬直した。佐藤海地がいたからだ。身長一八三センチ。タツパもあるがケンカも強い。なにより最強トリオの一人だ。

「うわわわ、か、海地さんっ」

ヤンキーは恐れおののき、あとずさった。周囲の野次馬も固唾をのんだ。そんな反応などお構いなしの佐藤は、なにげに俺の顔を見た。

「おケガは？」

一見優しい言葉に、俺はウンザリしてそっぽを向いた。

どうせヤツはあれだ。からかう絶好のチャンス！ とか思ってるんだらう。今日はどんな羞恥プレイだ、このド変態。

??もちろん、俺と関わりのない世界にいる時は、尊敬できる存在だ。パーフェクトな風貌、パーフェクトな人格、パーフェクトな頭脳、パーフェクトな運動神経……連呼すると、ただのパーみたいに思えてくるが、それは錯覚だ。あしからず。

さて、この尊敬すべきパーフェクトマンだが、俺に近寄って来る時は別だ。完璧な人柄の裏にある、たつたひとつの？ほころび？が際立つからだ。そこには意味のわからない復讐心に燃える、ただの人間がいる。だから少しくらいは、せめて俺くらいは、ヤツを変態あつかいしてもいいのではないだろうか？ まあ、死んでも口に出

して言うてはいけないが。

しかし??なんだろう。なにか様子がおかしい。野次馬は不安そうな顔をする。ヤンキーはうなだれる。俺はゆっくりと視線を戻した。すると、佐藤が少し目を潤ませながら、じいっと俺を見つめていた。

な、なな、なんだ!?

得体の知れない恐怖を感じて身構えると、佐藤は静かに口を動かした。

「どうしてあなたは、俺たちを選んでくれないんですか？ まったく納得がいきません」

……ん？ 選ぶって誰が？ なにを？

「あの桜井ってチャラ男が勇者とか、あり得ないでしょう」

あれ？ 幻聴かなあ。今「勇者」って言わなかったか？ なんのゲームの話だよ。つか、桜井とテレビゲームやった記憶はない。

もっばらRPG派の俺とは違い、桜井はパズル系や謎解き系のアドベンチャーばかりで、俺とは趣味が合わなかった。

「てか、なんで桜井、知ってんの？」

俺が疑問を投げると、佐藤はカツとして肩を怒らせた。

「あなたの周辺には常に気を配っておりました！ 妙な輩が近づかないようにと、人知れず護衛していたのです。そうしていれば、いつかアプローチがあると期待して??それが、突然ぶってわいたよいうなチャラ男を仕えさせたりして！ おかげでこの十数年、どんなにみじめな思いで生きてきたか」

「待て。ぜんぜん話が見えん。だいたいな、最初にシカトしたの、そっちだろう」

俺が反論すると、心外だと言うように佐藤は拳を握り、腕を震わせた。

「幼稚園の時、我々が遊戯に誘ったら、断ったじゃありませんか」「えー？」

あたりまえだが、俺は眉をしかめた。

「んなガキの頃のことなんか、覚えてねーよ」

「遠足で手をつながなければいけない時も、差し出した手をはねのけた」

「うえ、そうだったけ？ あ、でも、おまえと手をつなぎたいヤツいっぱいいたじゃないか。俺は、みんなに恨まれんの嫌だから遠慮しただけだ」

「友達の似顔絵を描くという時も、ペアを組んでくれと頼んだ李幸をすげなく断った」

「そりゃ、あれだ。変に描いたら、女子から非難されんじゃねえか。俺、画力ねえし」

「里奈が家庭科で焼いたクッキーを渡そうとした時も、受け取らなかった」

「おまえね、周囲の男子の？受け取るんじゃねー！？的な空気、つか圧力、いや殺気、感じなかったのか？ 彼女にしてみりゃ、たまたまそこにいた俺に親切でくれようとしたただけだろうけど、俺は生きた心地しなかったぜ」

「……」

「……」

「なんだ、この沈黙。俺には耐えきれない沈黙だ。しかも背後にヤンキー、サイドは野次馬、目前には佐藤海地。」

「あ、ありえねえ。誰か夢だと言ってくれ。さもなければ、俺を瞬殺してくれ。」

「俺はドキドキしたが、そんなことは、おくびにも見せてはいけない。あらたな嫌がらせを思いつかせてはならないからだ。しかも、いまになってやっと原因がつかめた。ヤツらがことごとく俺を突き放していた、その理由。」

「悪気がなかったにせよ、百パー俺が悪い。そりゃ、繊細で上品な彼らは傷ついたことだろう。本当のパーは俺だ。アイムソーリー。どんな妬みを買おうと、相手の親切を断るのは良くないことだった。小心者の俺のバカ。海よりも深く反省するから許してくれ。充分な」

制裁も受けたと思う。もうここらで水に流そうよ。

……などは素直に言えず、俺は平静をよそおい、淡々と述べた。

「ひとつ、確認していいか？」

佐藤はピシッと背筋を伸ばした。

「はいっ、どうぞ」

「俺のこと知らぬ存ぜぬで通してたのって、もしかして、押してダメなら引いてみる、みたいな……？」

今の話を総合するに、おそらく、そういうことだろう。俺は一刻も早く解決をみたくて、意を決して尋ねた。すると、佐藤は珍しく顔を真っ赤にしてうつぶいた。凶星だったようだ。俺も驚いたが、野次馬もヤンキーも口をあぐりと開けている。

そうだよな。開いた口がふさがらないよな。押しも押されもせぬ彼らが、俺の関心を引くため躍りになっていたなんて、誰が信じるよ？ 俺も信じられんわ。みんなにチャホヤされているだけに、俺みたいな凡人に無視されたことが、さうとう応えたんだろうな。プライドをズツスタにして悪かったよ。でも、そんな挫折も味わっておいたほうが将来のためだぜ、ベイベー。

どこかで反省していない俺だったが、念のため、申し訳なさそうな表情でチロツと上目づかいに佐藤を見る。すると佐藤はさらに赤面した。

「と、と、とにかく！ あなたをあちらへお連れするのは、我々ですから！」

「は、はい？」

「ご安心ください。役目は立派に果たします。我ら三銃士の名にかけて」

はい、カット。その台詞おかしいよ、君。三銃士ってなんだ。俺、ダルタニアンか。まあ、おたくらの組み合わせは確かに三銃士っぽいけどな。

ちなみに俺が言っている「三銃士」とは、昔のフランス人小説家を書いた有名な物語のタイトル兼、登場人物のことだ。「一人はみ

んなのために、みんなは一人のために」という名台詞も有名だ。

フランスの片田舎、ガスコーニュ出身のダルタニアンが立身出世を夢見てパリへ行く。そこで銃士隊で有名なアトス、ポルトス、アラミスの三銃士と協力しながら、次々と迫りくる困難を解決していく物語だ。

……ん？ 待てよ？ 里奈がアラミス？……萌え！ いやいや、あれ原作は男だったよな。某アニメのオリジナル設定が男装した女になっただけだ。気を確かに持とう。

俺はひと呼吸置き、退路を探した。まず後ろはなし。サイドもアウト。となれば、佐藤の脇をすり抜けるしかない。俺はタイミングを見計らい、地を蹴った。そのまま青信号の横断歩道を猛ダッシュだ！

「あつ、トイチ様ー！！」

と叫んだ佐藤の声が聞こえたような気がしたが、そんなのは無視。コーラもシャカシャカふっちゃって、俺は憂うつな午後を迎えたのだった。

春休みは危険の幕開け（後書き）

*補足 「三銃士」

アレクサンドル・デュマ・ペール（仏） > 1802年～1870年
年々による小説。

ダルトニアンは、「ダルトニャン」と表記されるのが一般的なよ
うだが、耳に聞いた感じでは「ダルトニアン」という発音のほうに
近いので、筆者はそちらを選択させていただきました。

アラミスはシュヴルーズ公爵夫人と不倫していたという、とんで
もない男だが、日本が制作した「アニメ三銃士」では男装の麗人と
いう設定に置きかえられた。公爵夫人と不倫している男では、子供
向けアニメとして、ふさわしくないため変更されたのだろうし、つ
いでにアニメ的な受けを狙ったとも考えられる。

俺の外出事情とS王子（前書き）

なんとか上げてみましたが、ご期待にそえない内容だった場合はゴメンナサイ。なんか限界つす。

俺の外出事情とS王子

コンビ二前での事件から三日後。

いまさらだが、あの最強トリオが俺に恨みをいだいていたことは判明した。しかもスゲー小さい時のちっさいことで。

「意外にヤツらも、あれだなー、器ねえな」

二階の部屋で、ベッドに寝転がってポケっとしてしていると、一階から母の声が聞こえた。

「斗ー！ かあさん、ちょっと出かけるから。お昼と夕飯、テキトーに食べてね！ お金、テーブルの上に置いとくから！」

「ふあーい！」

返事をして跳ね起きた。午前十一時半。昼が近い。

俺は、さっそく階段をおりて、テーブルの上の二千円を取り、家を出た。

家を出るのは好きじゃないが仕方ない。なるべく散歩に出るような心掛けてもいることだし、メシのためなら重い腰も上げなければならぬ。

外出がおっくうなのは、世間の風当たりが厳しいせいだ。かといって引きこもらないのは、俺が置かれている状況を、親が知らないからだ。

さいわいと言っているのか、ご近所さんから職場のみなさんまで、両親に対しては、ごくごく普通である。俺のことも巧妙にごまかしているようだ。「よけいにタチが悪い」と言う人もいるかも知れないが、俺は「それでいい」と思っている。

こんな非常事態を親に悟られてはならない。ろくなことにならないのは明々白々だ。シヨックを受けるだろうし、まともな人間なら悲しむ。そんなとき、どう言い訳すればいいのか、わからない。慰めようも、励ましようもない。気の利いた台詞を吐けるほど、俺の

人生は深くないのだ。

先日も母が、「今日、商店街で真部くんを見かけてね」と、いい年をして乙女のように頬を赤らめ、キヤイキヤイ話していた。

「あなたも、幼稚園から中学まで一緒だったんだから、一回くらい家に遊びにこさせる甲斐性もちなさいよ」

とまで言われ、俺は、にが笑いしてやり過ぎた。

なにも知らない母の小さな幸福と平和を、俺が壊す権利などないはずだ。もちろん、ほかの誰にも。

したがって、俺は外へ出る。健全な精神でいるためにも、両親に不審がられないためにも、必要なことなのだ。

とはいえ、弁当屋へ向かえば待ちぼうけを食らわされる。「慣れたからいいや」と言いたいところだが、こんなこと、慣れるわけがない。ストレスたまりまくりだ。「引きこもらないこと」健全な精神でいられる」のかどうか、はなはだ疑問に思えてきた。

十一時四十分に注文した弁当が渡されたのは、一時半。いいかげん腹がへる。家に帰ってゆっくり茶でも飲みながら、なんてことはしてられない。

そうとも。そんな悠長なこととしていられるか。空腹こそ精神の崩壊をまねく。

俺だつて、よくかんで食べなければいけないのは知っている。だがもう、がまんの限界だ。

俺は、弁当屋を出たところで勢いよくかき込み、胃袋を満たしてから家路についた。

その途中の出来事だった。不幸は、ひよんなことから訪れる。

「夕飯の弁当も今のうち買っとくか」と、まいど待たされることに疲弊していた俺が思い立つのは必然だったのだが、それがいけなかった。

スーパーがある方角へ踵かかひを返したところで、私立校のメンツに出

くわした。四人組。春休みのさなかブレザーということは、部活帰りだろう。部活帰りということは、いまだ学生しているわけだから、最強トリオの後輩だ。見た目は可もなく不可もなく、俺といい勝負だ。

「……おまえ、河波斗一かわなみといちだな？」

「そうだけど？」

「聞いたぞ。海地かいじさんたちの心づかいを、ことごとく無視し続けてきたんだって？」

やんわりと睨みつけられた。

まずい雰囲気だ。いつぞやの単純明快なヤンキーたちとは異なる悪さだ。ひと言で表せば「陰湿」??

俺は逃げようと思ったが、相手のほうが一枚上のようで、こちらが行動するより先に、腕をつかんできた。

「その性根、オレたちが叩き直してやる」

俺は、ほうほうの体ていで家にたどり着き、ベッドの上に身を投げた。「うっ……」
五分程度だったが、ボコボコにしばかれた。身体のアちこちが痛い。

今回は佐藤の救いの手もなかった。コンビ二前の一件で完全にキレたのかも知れない。護衛……していたとか、言っていたような気もするが、すでに記憶があやふやだ。

品性を重んじる連中だから、「自分たちのことで暴力沙汰を起こすのは遠慮してくれ」と、これまで睨みをきかせていたのだろう。しかしアレ以降、解除してしまった可能性は高い。

先行き不安な感じが倍増してしまったな。やっぱり、あそこでは謝り倒すのが正解だったのだろう。しょぼい意地のせいで、うっかり選択を誤った。ゲームオーバー寸前だ。どっかにリセットボタン

ないかな？

視線をさまよわせ、枕元に置きっぱなしだったケータイに手を伸ばした。桜井からメールが何件か入っていた。

12:01? 片付け完了! 今からメシ食って、ちよつと都内見物する?

13:30? 渋谷交差点前? (写メ)

15:03? なになに? なんで無反応なわけー? スカイツリーとかの写真が良かったかー??

15:24? 夏休みに呼んでやるから、無視すんなよー! (泣)?
?? なんかウンザリした。

「ホント友達いないヤツだなー」

俺はゆつくりとメールを打ち、返信した。

? 悪い。ちよつとボコられてて、それどころじゃなかった。東京の写真なんかいらね。テレビでしょつちゆう見られるもん撮って、なにおもしろい?

送信。

ケータイはまた枕元に放り、俺は眠りに落ちた。

……い、痛^いつてー!

衝撃的な痛みを感じた俺は、震えあがって目を覚ました。

「あ、ゴメン。シミた?」

ピンセットに綿をはさんで持っている桜井が、のほほんと言った。その体勢からして、おそらく消毒してくれていたのだろうが、尋常じゃなくシミる。

なにしてくれてんだ、貴様?? て、おい。

「桜井?」

眉をしかめる俺に、桜井はニコツと笑いかけた。

「飛行機って速いな」

「ぶっ！ おまえ！ わざわざ飛行機乗って来たのか！？」

「わざわざつてこともない。おまえがヒドイ目にあってるっていうのに、のんきに東京見物してた自分を反省してだな」

「いや、そんなの、おまえに関係ないし」

「友達じゃないか」

「だからって、飛んで来るのはどうかと思うぞ」

「それで？」

「ん？」

「それで、あの三銃士は、なにをしてたんだ？」

人の意見を無視して唐突だな。しかも笑顔だが、明らかに怒り心頭の声色。怖え……笑いながら怒るヤツ怖え。

つか、なんだそれ。思わず気づかないふりしそうになっただけ、そういう渾名あだながまかり通ってたりするの、あの三人。超ハズカシ一な。最強トリオってネーミングもどうかと思っていたが、三銃士とはな。もはや日本人ですらない。

そついや、みずからも名乗っていたな。周囲に崇められているだけでは飽き足らず、「我こそは、かの有名な三銃士の一人、佐藤海地である」と自己紹介してたりするんだろうか……

は、恥ずかしくない。ギャラが発生する仕事ならともかく、とても冷静な考えの人間がやることじゃない。祭り上げられて血迷ったのか？ いや、いや、きつとファンサービスだ。ヒドイありさまだが、期待に応えようとした結果だろう。そこには凡人がおよびもしない苦悩があつたに違いない。そして彼らは乗り越えた（越えてはならなかったと思うが）。羞恥心をかなくり捨て、壁をぶち壊したのだ。スーパースターとしての、ゆるがぬ地位のために？

とか、勝手な想像してみたが、ほぼ間違いないだろうと思えるのが悲しい。努力と勇氣は賞賛するが、お近づきにはなりたくないなあ。あまりに不憫ふびんなのでフォローしてやろう。

「取り巻きだか後輩だか、得体の知れない連中のやったことだ。あいつらの与り知らぬところだろうよ。別に知ったところで、知った

「こっちゃんないようなことだしな」

すると桜井は、

「そんなわけあるか！」

とピンセットをグツと握って、憤慨した。

「職務怠慢だ！」

どんな職務に従事してるんだよ！ 意味わからんわ！

「俺のために怒ってくれんのは、ありがたいけど、もう帰れよ。こんなことくらいで飛行機使うな。金もつたいねー」

「そうはいくか。おまえ、自分の立場わかってんのか？」

「わかつてる」

スゲエちっさいことで最強トリオの恨みを買った、しがない男だよ。

顔をそむけた俺に、桜井はため息をひとつ、もらした。

「とにかく春休みのあいだだけでも、俺、こっちにいることにする」

「はあ!？」

なにを言い出すんだと、俺は視線を戻した。

桜井は、ジツと俺を見つめていた。計るような、単純に心配しているような、妙な具合に。

「俺という時は、こんなことなかっただろ？」

台詞まで、どこか探るような、求めるようなニュアンスがある。

俺は眉をひそめたが、間がもたないし話も続かないので、それとなく返答した。

「……そっぴや、そっぴかな？」

でもそれ、おまえ効果なのか？ 今日ボコられたのは、トリオが規制解除したからじゃないの？

俺が首をかしげていると、桜井はしびれを切らせたように言った。

「こっぴえても強いんだよ、俺」

え、自己アピールしたかったのか？ そりゃ彼女とかに告ったら、かなり効果的な台詞じゃね？ いや、「ケンカ強いんだ」アピールは女子にしてもウザがられるって話も聞いたことあるな。やっぱ野

郎相手のほうが、ビビらせるためにも効果的か??て、俺ビビらせてどうする。

あ、もしか「親友」アピールか？友人としての価値を押し出したいのか？安心しろ、おまえの価値は知っている。いまさら、そんななんいらん。いらんから東京に帰ってくれ。俺は騎士^{ナイト}や王子を待ち望んでいる少女じゃない。もちろん戦隊ヒーローの登場も期待していない。そこにいかなる友情があるうと、ボディガードまでしてもらおう義理はないだろう。

「えーと、気持ちだけで結構です」

やんわり断ろうとするあまり、丁寧語になってしまった。

桜井は眉間をよせて、ちよつと睨んだ。

「おまえ、実は俺のこと、友達と思ってる？それとも気をつかってる？本当に平気だって。チンピラの十人や二十人、蹴散らせてみせるって」

や、チンピラじゃねーし。そもそもコイツ、なにしに来たんだっけ？

俺は痛くなりそうな頭をかかえた。

「そんなに強いなんて、初耳だけど。なんかやってたか？」

「剣道も柔道も、有段」

俺は目を見開いた。まさに初耳なことを聞いたからだ。

台詞の順番、間違っただじゃねーか……

「稽古とか、いつやってたんだ？全然、気づかなかつたけど」

「早朝と夜」

「ふうん、意外と努力家なんだな。見直した」

少し感心してやると桜井は嬉しそうにして、消毒液を含ませた綿を腕の傷口にあてた。

「ギーッ！」

拷問のような手当が終わり、俺は心身ともに疲れ果て、ベッドに寝そべった。

くっそー、桜井は絶対Sだな。人が痛がってんのを見て、笑ってやがった。

その桜井Sは今、救急箱のフタを閉じ、床の上にあぐらをかいた。「もう少し様子見ようと思っていただけ、これじゃダメだな。やっぱり春休みのあいだとか言ってるんで、さっさと帰っちゃおうか」

お？　なんか知らんが東京帰る気になったか？

腹ばったままの姿勢で俺が顔を向けると、桜井がニツと笑った。

「連中には悪いけど、この勝負、俺の勝ちだな。そうだろ？　トイチ」

……んん？　急にまた、なんの話だろうか。こいつの話はいつも飛ぶな。

俺は眉間を険しくした。そこへ、けたたましく階段を駆け上がる複数の足音。俺はびびって身を起こした。しかし桜井は、「大丈夫」と穏やかに笑んだ。

部屋の戸を開けて入って来たのは、なんと最強トリオだ。

佐藤海地、さとうかいじ真部李幸、まなべりこう坂本里奈、さかもとりいな

う、うおおおおっ、里奈が俺の部屋に〜！

という胸中の喜びの絶叫は無視するとして、不法侵入だぞ、君たち。

同じ忠告をしようというのか、スツと立ち上がった桜井が、三名と対峙し、冷たい視線を投げかけた。

「おまえらは無能だな。トイチ様をこんな目にあわすなんて」

違った。あさつての方向だ。しかも、なんか敬称つけてるし。ちよつと、異常に恥ずかしくなってきたぞ。超庶民の友達つかまえて「様」はないな。不必要に持ち上げて羞恥心をあおろうという手法か。おまえも羞恥プレイ好きなド変態なのか。あ、すまん、Sだったな。じゃあ羞恥プレイも好きかな？

俺がみるみる赤くなっていくあいだに、佐藤が一步、進み出た。

「貴様、何者だ。こちらの人間ではないな」

「俺を知らないなんて、無能さに拍車をかけてるな」

「なんだと！」

「俺はトール・ジエイドだ」

最強トリオは顔色を変えた。俺一人だけキョトンだ。どうやら、台本もらってない状態で舞台に放り出されたようだな。よし、仕方ない。木か石の役でもやろう。

?? 現実逃避というよりは、*現実回歸しようと思命になっていると、桜井が言った。

「トイチ様は俺が連れ帰る」

最強トリオは拳を握り、腕を震わせ、桜井越しに俺を見つめた。

「エンブレムをプリンスにお渡しになるのですか」

「またも涙ぐむ佐藤海地。」

いや、訳わからんよ。急になんだ。エンブレムって、車についてるアレか？ プリンスって誰？ もしかして桜井？ プブツ、世間の印象そのままのジョブかよ?? て、笑ってる場合じゃねえ！ 車なんか持ってないし、王子様の執事でもない。いったい俺になにを望んでるんだ、おまえたち。

はっ！ なけなしの貯金、二万五千円をねらっているのか!?

あれは携帯ゲーム機を買おうと必死こいて貯めた金だ。誰にも渡さねー！

やや錯乱している俺を置き去りにして、桜井はなお、不敵に笑んだ。

「当然だな。こちらでまともにお仕えたのは、俺だけだ。それに引きかえ、おまえたちは害虫同然の働きしかしていない」

どう聞いても、桜井は最強トリオを侮辱している。俺はハラハラしたが、ヘタに仲裁に入っても悪化させかねないので黙っていた。

俺は石、もしくは木。

しばし全員が沈黙。

が、それをやぶるように、今度は真部が身を乗り出した。

「所詮、エンブレム欲しさの行動だろう。そんな浅ましい心を、エ
レメンタルブレイカーが見抜いていないはずはない」

すると桜井は、肩をすくめて笑った。

「エンブレムなどいらぬ。俺が欲しいのはエレメンタルブレイカ
ーそのものだ。けどまあ、このままだと、エンブレムも自動的に俺
のものになつてしまふな」

「くっ……！」

佐藤が齒ぎしりすると、桜井は勝ち誇つたように口の端を上げて
笑い、どこからともなく杖を取り出して、かざした。うねうねグネ
グネした鳶のような形状の、木製の杖。それはシューツという音と
ともに、黒い光を集めた。意外に鋭い輝きに、俺は目を細めた。

目を閉じたのは一瞬だ。一秒もなかつたと思う。

俺の外出事情とS王子（後書き）

* 訳注……「現実回帰」筆者の造語です。「現実には、ひとまわりして戻りたい」という感じ。

ワンダーランドと心の現実（前書き）

三話目があがった……奇跡です。この奇跡、いつまで続くでしょうか。

応援してくださる方がいるかぎり続けようと思っておりますが、「ウザイからやめろ」という声が上がれば次第、終了いたします（T-T）
どうぞヨロシク。

ワンダーランドと心の現実

蒼い月明かりに照らされた森の中。ラメをちりばめたような葉。ねじまがった幹。地面には湿地帯に咲くような可憐な白い花。ちらほらとホタルも舞っている。

そこへ座っていた。目の前には、悠然と見下ろす桜井がいる。そのバックには、しかめ面した最強トリオが……

里奈のしかめ面など初めて見るが、そういう顔もカワイイ。しかしあまり、してほしくない。ちなみに、彼女の両脇に立っている佐藤と真部が日本人じゃない。佐藤は金髪に青目だし、真部は銀髪に紫色の瞳だ。よく見ると、里奈も目が緑色になっている。

悪かった。おまえらは三銃士で正解だ。どっからみてもヨーロッパだ。そんなに睨まないでくれ。

「立てるか？」
桜井に声をかけられ、手を差し出された。

「お、おう」
俺は手を取らずに立ち上がった。置かれている状況をのみ込めないながらも、ひとつだけハッキリわかることがある。それは「桜井も、俺の知る桜井ではない」ということだ。ゆえに、手など取れなかった。

所在をなくした桜井の手は、やや戸惑ったようにしまわれた。月明かりの中の漆黒の髪。黒水晶のような眼差し。ゆいいつ代わり映えのしない彼でさえ、日本人だとは断定できない雰囲気をも、かもし出している。

おまえら、いったい、なんなんだ。
と吐き捨てたい気持ちを抑え、俺は拳をにぎって、うつむいた。
いきなり鈍器で後頭部を殴られたほうが、マシな展開だと思う。

数時間前までの日常は、なんだったのだろうか、怒りさえ覚える。そりゃあ、最強トリオとは距離を置いていたし、桜井とは、たか

だが三年のつきあいだ。どれだけ互いのことを知れるかなんて、限界がある。だけど、それなりに普通の高校生してたじゃないか。なんの前触れもなく、その壁をやぶるのは卑怯だろ。

もんもんと胸の内で文句をつぶやくさなかも、だんだんと正気が「ここは異世界ですよ」と認識させてくる。そんな心にあせった。瞬間移動したことは確かだが、そこまで受け入れる準備はできていない。

とはいえ、連中が意味不明な単語を飛ばし始めたあたりから、嫌な予感はしていた。やつらが小芝居などしていないことはわかっていた。そのくらいの空気は読める。だから、この事態を全力で否定する気はない。だが、もうちょっと説明が欲しかった。

どうするつもりか知らないが、なにもかもが突然すぎる。こんなフエアじゃない。考える間くらい与えてくれたってバチはあたらないだろう。

「お怒りになられているのでは？」

真部が桜井に向かって、嘲笑ぎみに言い放った。桜井は舌打ちし、俺の顔色をチラリとうかがった。

「怒っているのか？」

桜井の質問に、俺は答えなかった。代わりに佐藤が言った。

「同意を得て連れ帰るのがルールだったはず。あなたも同意を得られていなかったのでは？」

桜井は忌々しそうに口元をゆがめ、俺の腕をつかんだ。

「ふりだしなんてゴメンだぞ。俺に決めてくれ」

「……なにを？」

俺はやっと声を出して尋ねた。桜井は苦虫をかみつぶしたような表情で、つかんでいた手を離れた。

「この三年間で、俺のことは見極めただろ？」

「だから、なんのことだよ」

「はぐらかすな。エンブレムに決まってる」

「エンブレム？」

「勇者として選ばれた者から一人、英雄として認められる者に与える、あれだ」

なんだ。車の前とか後ろについてるアレじゃなかったのか。

「て、おまえ、英雄になりたかったの？ ちよつと笑えるんだけど」「茶化すな。俺は英雄になりたいんじゃない。ただ、今回は選ばれないとマズイんだ」

「なんで？」

「王位継承権を剥奪される」

「剥奪……？」

俺が眉をひそめると、桜井はバツが悪そうに鼻頭を指でかいた。

「ちよつと遊びが過ぎた」

あー、つまり、あれだ。王様みたいなのがいて、ドラ息子に試練を与えたんだな。そーか、おまえ、ドラ息子だったのか。どうせ女とチャラチャラ遊んでたんだろ。うらやましいな、チクシヨー。つか、人間界でも遊んでたじゃねーか。反省の色なしだな。ああ、「人間界」って言っちゃったよ。こうなりやヤケクソだな。

「それで？ この三銃士は？」

俺が視線をやると、真部が姿勢を正して発言した。

「我々は純粹に、気高き志をもって、このたびの試練に望みました。トール王子と一緒にしていただきたくありません」

「いや、もともと一緒にはしてねえよ」

羞恥プレイ好きのドSなイケメンという以外は。

「どうですか、トイチ様。ここは仕切り直しということ、我々三名の中から選ばれては」

「バカ言うな！」

桜井が憤慨した。

「遠巻きに指をくわえて見ていただけの連中に、やすやすとエンブレムを渡せるか！ だいたい、トイチ様のこのケガも、おめえたちが要因だろう。どう責任とるつもりだ！」

「下心たっぷりに仕えていた王子に言われたくありませんね」

「物欲しそうな顔したビンボー三銃士に言われたくないな」

「黙れ。金と権力にまみれた薄汚いプリンスめ」

「なんだと、この野良三銃士」

イケメン王子とクールビューティー銃士が罵り合うのも、けつこ
う見苦しい。品性はどうした、真部くん。

ともかくも、置かれている状況は、だいたい把握できた。エンブレムとかいうのを与えてくれるらしい人物と俺とを間違えてるんだな、こいつらは。なるほど。俺に対する態度の謎が少し解けたぞ。いやいや、それにしても、ぞんざいな扱いを受けた気もするが？ま、俺と間違えられるくらいだからな。たいしたヤツじゃないんだろ。まったく、いい迷惑だな。……早いところ事態を収拾しよう。

「注目！」

俺は声を張り上げた。王子と三銃士の視線が集まった。俺は咳払いし、胸を張った。

「ここでひとつ、重大なお知らせがある！」

「な、なんででしょう」

「うむ。心して聞け」

「は、はい」

「俺はエンブレムとか知らないし、この世界がなんなのかも不明だ。つまり！ おまえたちは大きな勘違いをしている！」

王子と三銃士は目を点にして固まった。よし、言っちゃったぞ。

バカめ。俺はただの人間で、絵に描いたような凡人だ。そんな人間と、エンブレムとやらを与えるらしい人物とを間違えるとは、笑止
だな！

「……え？ まさか」

徐々に目を見開く彼らに向かい、俺は駄目押ししてやれとばかり、おもいつきり首を縦にふった。

「完全な人違いだ。というわけで、俺を元の世界に帰してくれ」

桜井をはじめ、最強トリオは硬い表情で俺を眺めた。

「おかしいな。絶対に間違いないと思ったのに」

「絶対に間違いだろ。どこを見て言ってるんだ。つか、最初に確かめる」

「それはできないルールだ。しかし名前に？イチ？がついていて、かつ三銃士が転生した近辺に生活している同期の桜という条件では、おまえが一番はまっていた」

はい？ 俺の耳が確かなら言ってるのか。おまえら「アホ」だろ。意中の人物捜す情報が、たったのそれだけか。たったそれだけで俺だと判断したのか。そりゃあ取り違いも起こるだろう。名前に？イチ？のつく野郎が、どれだけいると思ってるんだ。ちゃんと市内中、捜しまわったのか？

「大丈夫かよ、おまえら。ルールも大事が知らないが、臨機応変に対処しろ。今頃、本物さんが路頭に迷ってんじゃないのか？」

佐藤がハツと反応して、唸った。

「ムダな歳月を過ごしたというわけか。くそつ。こうしてはおれん。さっそく捜しに向かうぞ」

三銃士はさっそうと立ち去り、一步出遅れた感のある桜井も慌てて杖をかざした。杖の先に集まる黒い光？？桜井は消えた。

そして、俺は。

取り残された。右も左もわからない森の中、おいてきぼりをくらった。おまけに部屋から直行だったので、裸足だ。

「じよ、冗談だろ、おい」

無責任にもほどがある。勝手に連れて来て、違っていたら知らぬ存ぜぬか。

俺は途方に暮れ、空を見上げた。満点の星。綺麗だ。小さな星のまたたきまで無数に確認できる。月明かりに照らされながら、これだけの量の星が肉眼で見られるとは、ここは相当、環境がいいに違いない。

星座はやはり、大きな星をつないで作るのが基本だよな。よし、あれとこれを、つないで??なんの形にもならんな。

とか、のんきに天体観測している場合じゃない。とにかく森を出て人里を探そう。言葉が通じるか否かは別として。いや待てよ。案外ここで待ってれば、人ひとり置き去りにしたことを思い出した連中が、迎えに来てくれるかも。

と、腕を組んで思案してみるが、こめかみがうずいた。

うーん、あんな身勝手そうな連中が、もはや用済みとなった俺を思い出すだろうか。用済みどころか用なしだったわけだしな。なんということだ。こんなことなら、ちゃんとした対応を受けてから、正体を明かすべきだった。

いまさら遅いので、とりあえず歩を踏み出した。ときおり雑草をかき分け、けもの道を行き、あてもなく歩く。だが心は落ち着いていた。案外、俺もタフなのかも知れない。

まあ、森がメルヘンチックだしな。危機感なんぞ、それがまくりだ。地面はフカフカで裸足でも痛くないし、ところどころにカワイイきのこが生えていて、夜行性の小動物がウロウロしている。そして虫の声は、まるで子守唄のように優しい。

虫が鳴いているということは、秋なのだろうか。しかし蛍がなあ、初夏だよなあ。ここ、季節感はないのかもしれない。

森を形成している木々の葉は月の光を受けてキラキラと輝き、飛び交う蛍も道を照らしている。夜なのに明るすぎる森だ。そして球体の花を咲かせている植物に触れると、鈴の音が響く。とても澄んで美しい音色だ。

まるで絵本の世界。ひよっこり小人が出てきても驚かないぞ。いつそ出てきてほしい。話のわかる小人が。

甘かった。結局、夜明けまで何者にも出くわさず、森を抜け、草

原を歩いている。前方から日が昇ってきた。ここでの方位が元いた世界と同じならば、東に向かって歩いているのだろう。

人間、太陽に向かって歩いていけば、まず間違いない。まったく根拠はないけどな。

「そついや、腹へったな」

昼に食べたきりだったと、あたりを見まわした。だが一帯は草原だ。食べそうなものはない。人里もない。

「歩くよりほかなさそうだな」

さて、三時間は歩いたんじゃないだろうか。空腹と疲労で、足元がおぼつかなくなってきた。しかも草原を歩いていたはずが、いつのまにか荒野だ。

はじめて訪れた森の豊かさとは縁のない荒れ地。乾いた土と、貧相な雑草と、照りつける太陽。ときおり吹く風が熱を帯びていて、埃を巻き上げる。

俺は「このまま進むと確実に砂漠だろうな」と予感させる錆びた匂いにむせて、咳き込んだ。

……水、飲んでえな。

喉が渴いた。吸い込む息が食道の壁面に張りつく。脱水症状が出るのも時間の問題だろう。しかし見渡すたびに、果てしない荒野。川のせせらぎも聞こえず、水の気配はいつさいない。足裏も痛くなってきた。さすがに裸足でここを歩くのは無謀だ。熱いし。苦行じやあるまいし。

くそつ、恨むぞ桜井。友達だなんて、嘘つきめ。エンブレムつてやつが目当てだったんだな。そりゃ、世話にもなった。けど心がなきゃ、なにもなかったのと同じだ。おまえは、なにもしなかったのと同じだ。たとえ俺がエンブレムを持ってたって、おまえには絶対やらねえ。もちろん三銃士にだって。

??本物はやるだろうか。見る目のあるヤツなら、やらねえよな？俺はその場に座り込んだ。もう限界だった。

木陰がないので、ジリジリと日に照らされっぱなしだが、どうでもいい。ひどく投げやりな気持ちだ。やはり空腹は精神の崩壊をまねく。

することもないので空をあおいだ。ゆうべ見た美しい夜空が嘘のように、雲ひとつない真つ青な空。地獄のような晴天。

単純に、引き返せば森に着くだろう。だが距離を思うと萎^なえる。

ここで終わりか、俺の人生。中二から高校卒業まで、全校生徒のみならず、街人からシカトされ続け、あげく見知らぬ土地に放り出されて昇天……ム力つくな。あんな連中に勘違いから振りまわされて、行き倒れとか。後世まで崇^つてやるから覚悟しろ。

死の間際の悪態をつけてから、俺は仰向けに寝て、目を閉じた。ゆっくり死ぬのはキツイだろうが、どうしようもない。ここは俺が生まれ育った世界じゃないんだ。きつと生き延びても、苦難しか待ち受けていないだろう。ならばいっそ、ここで尽きたほうがいいに決まっている。

俺は渴きと飢えに、生きる希望まで失った。肌を焼く日光が容赦なく身体の水分を奪つ。それは同時に、異世界にあることの現実を叩きつけていた。

本当に、もうダメだろう。

そう思った矢先だった。

「おい、死んでるのかー？生きてたら返事しろー」
横柄な口調の声がかかった。言葉はわかるが、声の主に心当たりがない。

俺は目を開け、視線だけを投げた。

ラバ、いやラクダ、いいやウシ、シカ、ウマ……よくわからない生き物にまたがった無精髭の男の姿が目には焼きついた。

ハリウッド！

心の中で思わず叫んだ。ハリウッド俳優さながらの風貌だったか

らだ。亜麻色の髪にグレーの瞳。精悍な面差し。おそらく高身長。野性味ただよう表情と笑みがカッコよく、口元からは白い歯がのぞく。全体的にベージュの衣装で、はおったマントの裾はほころび、ブーツも薄汚れているが、いい味を出している。三十代あちこちの様子だが、かなり渋い。こういう男になりたかったよな、と思わせる男だ。

ただひとつ難点をあげるとすれば、耳の先がとがっていることだろう。連想されるのは悪魔だが……

いつきに血の気が引いた。

地獄からのお迎えとかなしだろ。勘弁してくれ。俺は潔白だ。とくに善もおこなわなかったが、悪じゃない。

見も知らぬ神様に向かつて必死に言い訳しながら、再び目を閉じた。強く閉じた。絶対に目を合わせてはならない、そんな気がした。しかし男が地におり立ち、近づいて来る音と気配を感じる。万事休す。

「こら、生きてんだろ、無視するな小僧」

髪をつかまれた。身が縮まったが、どうせ死ぬつもりだったのだ。俺は「悪魔と戦ったっていいじゃないか」と妙な具合に開き直り、目を開けた。

男はしばらく無言で俺を眺め、やがて言った。

「なんだ、ヒューマンか。ちっ、気づくんじゃなかったなあ」

ヒューマン……位置づけは「人」と解釈していいんだろうな。

「ここはフェアリー自治区だ。どうしてヒューマンがいる？」

フェ、フェアリー。ということとは、待てよ。あんた妖精なのか？

悪魔じゃなくて？ 助かった！ けど、なんか夢が壊れるなあ。妖精といえば、ちっちゃくて、羽根が生えてて、女の子で、キュートなイメージなんだが？？どうみてもワイルドなガンマンだ。

「おい、質問に答えろ」

イラ立つ男に、言葉を発する元気もない俺は、懸命に声をしぼり出して答えた。

「み、水くれ」

世間様に、命汚いと言われようが、なに言われようが構わない。急に死にたくなかったのだ。

相手は言葉がわかるうえに、極悪そうでもない男である。水の一杯くらいくれるだろうという希望がわいた。ついでに生き延びて、俺を置き去りにした連中に文句のひとつも言い、唾を吐きかけてやるうという復讐心も目覚めた。

男はまず、腰元の水筒を渡してくれた。俺は急いで受け取り、遠慮なく飲み干した。

「うち、来るか？」

なかば呆れた様子の誘いにも、すばやく乗った。

「行きます」

男はニヒルに笑った。

「おかしな野郎だぜ。ヒューマンのくせによ」

で、荒野の端とも中間とも判断がつかない場所にポツンとたたずむ、小屋へたどり着いた。形状はラクダ、背中の模様は子鹿、頭部の角は牛、足はラバ、たてがみと尾が馬という、訳わからん動物の背に揺られ。

男の名はクレイ。脱水症状寸前のうえ裸足である俺を哀れに思ったらしいクレイは、動物の背を俺に譲り、徒歩で引いて行ってくれたのだ。

「シャーリー、水、用意してくれ」

俺を連れて小屋の戸を開けるなり、クレイは言った。中にいたシャーリーと呼ばれた女は、両手を腰にあて、首をかしげた。

「なーに？ 帰ってくるなり」

そこで俺は最大級に目を見開いた。シャーリーがナイスバディな

お姉さんだったからだ。

衣装は金属っぽい質感の黒ビキニで、ベージュのマントをつけている。足元はかかとの高い黒のロングブーツ。なにかの女王様を連想してしまうが、とにかく美人だ。ゆるやかに波打つ長いブロードヘアと琥珀色の瞳。厚めの唇。胸は豊かで、クビレもしっかりある。全体の露出度はR指定ギリギリだ。

エ、エロイ。クレイの彼女が奥さんだろうな。やっぱりハリウッドには女優がつきものか。いいなー。

「そのへんのイスに座って待ってな」

クレイが言った。木製の四角いテーブルの周囲に、同じく木製のイスが四脚ある。疲れていた俺は、素直に言葉にしたがった。

「だあれ？ この子」

シャーリーは水差しから水をコップに注ぎつつ、眉をひそめた。

「そっぴや名前聞いてなかったな。なんて名前だ」

クレイに尋ねられ、俺は戸惑った。本当はクレイが自己紹介してくれた時点で名乗り返すべきだったが、喉の奥でのみ込んでしまった。桜井たちの話が周知のことなら、また名前から勘違いされしてしまうのではないかと警戒したからだ。

「やーね。名前も知らない子を連れてきたの？ しかもなに？ ヒューマンじゃない」

「行き倒れてたんだ。俺だってヒューマンなんか助けたくないさ。

だが、この自治区にヒューマンの死体が転がったら、あとあと面倒だろうがよ」

「そりゃそうだけど」

シャーリーは俺を見つめ、水で満たされたコップを差し出した。

俺は会釈して受け取り、いつきに飲み干した。

「よっぽど喉が渴いてたのね」

「腹もへってるんです」

シャーリーはこめかみを痙攣けいれんさせた。

「……図々しい子ね」

「人間、極限状態になると、恥も外聞もないんです」
「あらそう。パンとスープしかないけど、食べる？」
「喜んで」

飢えと渇きから解放された俺は、脳に糖分が補給されたせい까思
考回路が正常に戻った。ゆえに「自己紹介なんて名字でいいじゃん」
という単純な答えを導き出すことができ、あらためて二人に向かっ
た。

「あ、申し遅れました。俺、カワナミっていいいます」
「ホントに、おせえ」

クレイは呆れ顔と怒り顔、半々で応えた。

「ごもつとも。命の恩人にいまさら名乗るなんて、失礼きわまりな
いよな。」

「で？ なにがありや、あんなところで行き倒れんだ？」

「このへんのこと詳しくないんです」

「迷子かよ」

「はあ」

「ちっ。とにかくよー、ここで俺の世話になったからには、長に目
通りしてもらうぜ？ 覚悟はいいかよ？」

「おさ？」

「長老」

泊めてくれとは言わないが、ひと眠りさせてもらいたかった。し
かし休憩する暇もなく、俺はまた、あの形容しがたい生き物に乗せ
られ、荒野を横断させられた。

今、街にいる。

おもにレンガ造りの街並。森の中にある街で環境重視らしく、緑
がまぶしいくらいにいっぱいだ。家は木々を切り倒すことなく隙間

を縫って建てられている様子。ゆえに人工物でありながら森に溶け込んでいる。

行き交う人々は穏やかそうで、ほどよく繁栄している商店街も素朴さがある。なかなかいい街だ。

「おまえ、靴くらい履けよ。ないのか？」

馬代わりの動物の背からおりる時に、クレイに言われた。俺はうつむいて、自分の足元を見た。

「ないです」

「とんだ貧乏人だな。その服も……妙ちきりんだ」

だろうな。長袖のプリントTシャツにジーパンなんて、妖精さんには妙だろう。だが俺の世界では超無難なファッションなんだよ。目立ちもせず、ダサくもない。いたって平凡で一般的なんだよ。

ま、そんなこと力説する気はないが。

「しょーがねえな。あとで金返せよ」

クレイは俺の手を引き、店に入った。どうやら衣装と靴をそろえてくれるらしい。口では「金返せ」と言いながら、返してもらえる見込みがないのは明らかだろうに、さすがハリウッド。太っ腹。

黒いハイネックのノースリーブ。ベージュ色のマント。カーキ色のズボンに茶色のミドルブーツ。

「このマント、なにか意味あるんですか？」

俺が尋ねると、クレイは脱力した。

「そんなことも知らねえのか。スゲエ田舎者だな。ベージュのマントは、この自治区のカラーだろうが。連れ歩くのに、つけといてもらわねえと困んだよ」

「あー、そうですか」

コスプレみたいで恥ずかしいなと思ったが、せつかくそろえてくれたものを嫌がるわけにもいかない。ありがたく着させてもらった。

「お、似合うじゃねえか」

「え、ホントですか？」

試着室から着替えて出てきた俺を見て、クレイが褒めてくれた。めったに褒められたことのない俺は、ちょっと嬉しくて照れ笑いた。

「長老に会ったからな、粗相するなよ？」

「あ、はい」

気のゆるんだ俺をたしなめるようにクレイが言い、俺は背筋をのばした。

そりゃそうだ。偉い人に会うのに妙な衣装では失礼だからと、一式そろえてくれたのだ。俺のためじゃない。

俺のためじゃない。

その言葉が変に冷たく、胸に突き刺さった。どうしてだろうか。まるで遠いむかし負った傷のように、うずく。

桜井のせいだな。

と、むりやり結論づけた。金なし特技なし頭脳フツの、なんのメリットもない俺を友達だといい、メシをおごったり、カラオケ誘ったりしたのは、とどのつまりエンブレムのため。俺が好きとか、気が合うからとか、都合がいいからじゃなかった。街中の住人から無視されている、俺のためじゃなかった。救世主なんて、お笑いぐさだ。

俺は、なにを勘違いしていたのだろう。なんの価値もないのに、人並みに大切に思い思われる友達がいるとでも？ そんなわけないじゃないか。見知らぬ森に置き去りにしたって平気なんだ。きつと誰もが桜井と同じ。俺の行方など気にしないで過ぎるだろう。きつと誰でも??親ですら、もしかしたら。

今になって考えてみれば、いかに巧妙に隠していたとはいえ、街規模のシカトに気づかないなんて、よっぽど俺に関心ないと思えない。メシだって、たいてい一人で食っていた。共働きだから仕方ないのだが、そんな記憶しかないのは寂しすぎる。

見知らぬ土地にいるせい、なにかも信じられない気分にな

った。ブルーだ。五月病のような憂うつさだ。遅ればせながら、異世界に飛ばされたショックが襲ってきたみたいだった。

クレイに連れられて辿り着いたのは、寺院のような建物。西洋の田舎にひっそりと建てられた礼拝堂のような、慎ましやかな建物だ。白い石材が使われていて、正面上部に飾られた青いステンドグラスが、陽光をキラキラと反射している。三段ほどの幅の広い階段をのぼったところがエントランスだ。

「ここで待ってる。ちょっと事情を説明してくる」

俺は言われるまま立ち止まり、クレイを見送った。そして建物を背にするように振り向くと、階段下に集まった数人が、訝しげにして俺を観察した。おそらく「ヒューマン」だから、だろう。

ここの妖精とヒューマンの関係は不明だが、クレイの態度から、あまり良い関係とは思えない。だが石を投げ合うほど悪くもないようだ。

俺は疲労もあって、階段に座り込んだ。階段にも使われている白い石材は光沢がなく、表面が粉をふいている。ちよつと触って確認したが、粉はサラサラとしていて手につかない。俺は暇を持て余して、しばらく表面をなでていた。粉はベビーパウダーに似ている。手触りがいい。

そうしていると、七つくらいの少女がハンカチを持って寄ってきた。手を拭けという意味だろうか。しかし粉が手につかないことくらいは、少女も知っているだろう。ということは、もしかして儀式？ そうだよな。ここ、寺院っぽいもんな。神聖な場所へと導く階段を、いきなり素手で触ってはいけなかったのかも知れない。

まずいな。うまくやり過ぎさないと。

俺はとりあえず、手は洗っていて汚くないと証明するつもりで、手の平を見せた。少女はハツとし、ぎこちなくお辞儀して下がった。

よしよし、意図は伝わったみたいだ。

俺は安堵して、少女やその周りにいる人々に愛想笑いをした。そこへクレイが戻ってきた。

「お、バカ、そんなところに座ったら、ケツ真っ白になるぞ?」

「えっ!?!」

俺は慌てて立ち上がり、マントを払って自分の肩越しにケツを見た。だが問題ない。ホツとした。買ってもらったばかりの衣装を汚しちゃ悪いもんな。

俺はささいな失態をごまかすように笑って、クレイを見上げた。

「大丈夫。汚れてません」

が、クレイは固まった。目を見開き、俺を凝視している。

「……え?」

俺のどこに落ち度があったのか、わからない。

クレイは勢いよく俺の腕をつかみ、力強く建物の中へと引き入れ、客室らしい部屋に放ると、外から鍵をした。

「そこで、おとなしくしている。おまえの処遇は長老とよく話し合っただうえで決める」

まさかの監禁。

しよ、処遇ってなんだよ。えー? 階段に座ってケツ汚さなかったって、もしかして軽犯罪? それとも重罪? どんな犯罪?

ああ、しくじった。「俺はよそ者だから、こちらの法律とか、いっさい知りません。やつちやいけないことは前もって教えてください」と言っておくべきだった。今度こそ、俺の人生終わりかも……

ホームワード・バウンド（前書き）

なにかコメント入れようと思いましたが、もう余計なことはいわずにおこうと思いました。

なにかとご不満もありませんが、「まだまだ続く」ので、今後とも、なにとぞヨロシクお願い申し上げます、たてまつります。

ホームワード・バウンド

さあ、困ったことになった。

部屋には丸窓が計八つある。が、すべて顔面サイズだ。開閉も不可能で、明かり取りの用途しかない。「ぶち割って外に出る」という芸当はできないだろう。万が一そうするというなら「壁ごと」だが、あいにく俺は怪力サムソンじゃない。体力測定では平均値男と呼ばれていたくらい、腕力も握力も人並みだ。

ちなみに「怪力サムソン」とは、旧約聖書に出てくる超人だ。生まれてから一度も切ったことがない髪に怪力の源があった。しかし敵の女に騙され、髪を切られてしまい、ただの人間に。その後、敵に捕まり、目をえぐられ、両腕を鉄鎖につながれたあげく、見せ物に。が、生きてさえいれば髪はまた伸びる。

怪力を取り戻したサムソンは、敵の神殿を破壊して復讐を果たした。だが、みずからもその下敷きとなって死んでしまうという……うらやましくない男だ。

それはさておき。この部屋、ほかにも難点がある。ベッドとクロゼットと小さな丸テーブルだけで埋まってしまっていて、かなり窮屈だ。六畳……あるのか怪しい。漆喰の壁と剥き出しの梁、^{はり}全体的にアンティークな感じでまとまっているが、息が詰まる。あかすの窓が、そこに追い打ちをかけている。

当直の先生でも、もうちょっとマシな部屋に泊まるだろう。こう、センスはないが、利便性のある??ここはカップラーメンの湯を沸かすガス台もなければ、トイレもない。ただ寝るだけの部屋だ。くどいようだが、極めつけに窓が開かない。そのうえ小さい。

空気の入れ替えはどうするんだ。ひよっとしなくても酸欠にならないか？

俺は致し方なく、ベッドに腰かけた。クッションがきいている。枕も羽毛がふんだんに使われているらしく、フワフワだ。おかげでどっと疲れが出てきた。もともと疲れは感じていたが、プラス睡眠魔が襲った。

俺の明日はないかもしれない。だが眠気に打ち勝つことはできなかった。

爆睡し、スカツと目覚めた。おかげさまで、まだ生きている。

上体を起こしてみると、いつのまにか食事を乗せたワゴンがベッド脇に置いてあった。せまい部屋が一段とせまくなったわけだが、食事なら文句は言うまい。食わせてやるうという気持ちはあるということは、当面は生かしておいてくれるのだろう。よりよく解釈するなら「殺すつもりはない」という意思表示だ。

それにしてもシャレたワゴンだ。ステンレスみたいな無機質な感じではなく、乳白色で磁器っぽいツヤがある。二段式で、野バラが描かれているところなんか、高級感ただよっている。

上段にある銀色のドームカバーを取ってみると、おかずは鳥らしき肉料理だった。となりのバスケットにはロールパン。下段には茶器がそろえてあり、ティーポットはまだ温かい。運ばれたばかりだと思われる。窓の外もやや暗い。今がちょうど夕飯時なのだろう。

なんの肉かわからないところが恐ろしいが、この世界の者が食しているものだろうし、遠慮なく、いただくことにした。

「う、うまっ」

肉はガキのころ一度だけ食べた七面鳥に近い味。パンは焼きたたで、紅茶は香り高い。こんなまともな食事は近年稀だ。俺は夢中になって食べた。

「ごっそさん」

あっというまに完食。腹が満たされたので、あらためて部屋の中

を見まわした。クローゼット脇の壁につけられた小さな棚に、一冊の本をみつけた。言葉が通じるのだから文字も読めるのではと期待し、立ち上がって手に取ってみた。

革製の表紙。B5サイズで三センチほどの厚み。少し古めかしいので、やぶかないよう、そっと開いた。

「……うーむ」

眉間にシワが寄った。見たことのない文字だった。漢字どころかアルファベットやキリル文字、ハングル文字ですらない。解読不能しかたないので、ところどころにある挿絵を眺めた。

羽根の生えた小さな妖精。

カゴに捕らえられている妖精。

そのカゴを持ち、剣を振りかざす人間。

森林火災。

木こり。

身を横たえる妖精たち。

王冠を乗せている男。

両腕を広げている、長い髪とヒゲの老人。

銃を構える数人の男。

なにかのシンボルマーク。

人と体格差のない妖精。

妖精と人間と、そのあいだに立つ男。

わかったぞ。これはファンタジー小説だ。字が読めれば退屈しなくなる。ぎになっただろうに、惜しいことだ。

?? 未来の俺がここにいたら「ちげーよ！」と突っ込みを入れるところだが、あいにく今の俺は本気でそう思っていた。そもそも『歴史書』なんていう堅苦しいものは、俺の許容範疇を越えている。

やむなく本は棚に戻した。しかし、ほかに楽しらしきものがない。たーいくつ。

て、待て待て。監禁中だったよ。少しは身の上を心配しよう。どうやって罪を軽くするのか考える。弁護士プリーズ！　つか、どの程度の罪なのか判明してないな。どうなってんだろ。あのハリウッド、まだ長老と話してんのか？

ドアに目をやった。するとガチャツツと開いた。

ん？　あれ？　鍵開けた雰囲気なかったな。ひよつとして無罪放免になったのか？　そーだよな。冷静に考えたら、ケツ汚さなかっただけだぜ。褒められたって怒られることじゃない。

だが部屋に入ってきたクレイは、硬い表情をしていた。

「カワナミ、おまえ、本当の名は？」

ギクリ。

え？　そこに戻る？　自己紹介からリスタート？　……なんか、また誤解されてるっぽいな。あ、頭痛い。クレイの視線も痛い。どうしよう。

互いに汗をにじませながら、しばらく無言で向かい合った。苦手な沈黙だ。

うーむ。ここは正直に答えたらうえて、誤解を解くのが最善かもな。俺は決心して口を割った。が、そのわりにちよつと挙動不審な態度で答えてしまった。本番に弱い日本人の典型、それが俺である。

「カ、カワナミ、トイチだ、けど」

かみかみだ！　まずい！　怪しい！

「トイチ、か」

クレイは大きく息を吸って反復した。

トイチという名前に反応するなんて、やっぱりそこがネックなんだな。この世界の住人は。

「あ、あの、たまたま、そういう名前なだけで、エンブレムと俺は無関係です」

いまのうちに弁明しておこうと、俺は早口に説明した。が、「エンブレム」という発言に、クレイは尖った耳をピクピクさせた。

「誰がエンブレムと関係あるのかって聞いたよ？」

「ぎゃー！ 墓穴！」

「で、ででで、でもつ、本当に偶然、そういう名前なわけで」

俺は必死に否定した。しかし、クレイはさえぎるように強く舌打ちした。

「バカにしてんのか、おい。学校は出てないが知識はある。イチとは四大元素のイチだ。火のイチ、水のイチ、風のイチ、土のイチ。最も小さい値のイチだ。この世ではエレメンタルブレイカーのみが、この最小のイチを精製できる」

「つ、つまり？」

「名前にイチの文字を使用しているのは、エレメンタルブレイカーだけだ」

「知るか！」

俺は険しい顔で腕組みし、心底うなつた。なにかラチがあかない。ここはイチかバチか、異世界人であることを告白しよう。そのほうが解決早いに違いない。

というわけで、自分の中でそれなりにスゴイ決心をした。

「申し訳ありませんが、それ本当に俺じゃないです。俺は地球って星の日本という国に住んでいました。つい昨日か、おとついで。そこでは名前にイチがつくヤツなんて五万といるんです」

「それは知っている」

ガクツ。えー？ じゃあなんで納得してくれないんだよー。

俺は腕組みをとりて脱力し、答えを求めるようにクレイをみつめた。クレイは察したように、うなずいた。

「試練の場を選んでるところだろ？ 知ってるぜ。というより、いましがた長老から説明受けたところだ。それより勇者どもはどうした。一緒じゃねえのか」

勇者どもって……あの最強トリオと桜井のこと、だろうな。まったく、どこが勇者だよ。ロクな思い出ねーよ、くそつ。

俺はふてくされつつ、投げやりに答えた。

「人違いだとわかって、またあつちに戻っていきました。それで俺、

置いてかれて最悪なんですけど、どうにかありませんか」

「人違い？」

「そう人違い。だから、どうにかしてください」

「どうにかって？」

「元の世界に返してもらいたいんです」

「……妖精の粉がつかなかった人間を？」

クレイは不敵に笑った。映画でよく観るシーンみたいだったが、これは現実だ。俺はゾツとした。

「なめてもらっちゃ困るぜ、トイチ様？ 勇者の目にとまって、こつち流されて、名前がトイチで、妖精の粉をつけないなんて条件そろえて、人違いだと？」

「よ、妖精の粉？」

「階段に使ってる石の粉だよ」

ああ、あのベビーパウダーか。さすが異世界だな。由来とか成分とか原理がまったく未知だ。

しかし妖精の粉というと、ピンクやゴールドにキラキラ輝いていて、身体にパパツとふりかけ楽しいことを想像すると空を飛べちゃうアイテムだろ。階段なんかにあっという間の。

「て??あれ? イメージと違うな。ぜんぜん光ってなかったし」

「は？」

「わわわ、こつちのことです。とにかく本当に身に覚えのないことで、目えつけられても、どうしようもないんですっ。もし戻せるんなら、戻してください!」

顔の前で手を合わせて、真剣におがんだ。

もうマジで信じてもらわなければ困る。街人に無視されようが、レジ待たされようが、生まれ育った世界ほどいいものはない。異世界は心細い。これでもし言葉が通じなかったら、即アウトだ。

法律は無論、一般常識も知らない。文字もわからない。地理的知識も皆無。十八すぎた平凡な頭で一から学習しなおすのは厳しすぎる。

そもそも学校に通わせてもらえるのか疑問だ。家庭教師がつくとも思えない。納税制度があるかどうかも不明だが、あるとしたら、先祖代々この地に税金払ってこなかった者の末裔を、誰が養うというんだ。そんな甘い世の中、存在するわけない。

なによりも、向こうに残してきた貯金が気になる。こんなことから、さつさと現物に変えておくんだ。欲しいソフトもあったのに。……どうみても、ここには代用できそうな娯楽がない。次元の低い話だが、俺には切実だったりする。願わくば強制送還だ。

再び向かい合って沈黙すること数分。クレイは、それはそれは深いため息をついたあと、応えた。

「わかった、戻してやる」

俺は一瞬、信じられなくて、言葉がでなかった。九割「ダメだ」と言われること覚悟だったのだ。奇跡の大逆転。

「い、いいんですか？ ホントに？」

「ああ」

「やっ……たー！ クレイ、あんたは俺の救世主だ！ 迷惑だろうが、そういうことにしておいてくれ！ 一生、恩に着る！」

そんな心地でクレイを見つめていたものだから、きつと目がウルウルしていたのだろう。クレイは引き気味に、にが笑いした。

「断っておくが、疑惑が晴れたわけじゃねえぞ？ さつさと英雄選んで帰ってこいと言いたいところだ」

え、英雄か。英雄ってそもそもなんだ？ 人助けする人のことじゃねえの？ ふっ、あの勇者どもが人助けだと？ 笑わせんな。ほとんど歩く公害だ。勇者ってことすら認めたくねえよ。

「じゃあよ、さつそく準備するから、こっちこい」

「は？ あ、はい！」

おお！ さつそく返してくれるのか！ いいヤツだな、クレイって。

で、実際に俺を返してくれるのは、長老と呼ばれている男だった。

長老というからには、長い白髪に白ヒゲの老人かと思いきや、意外に若いナイスミドルである。

紺色の髪と青い瞳。ハンサムでスタイルも良く、威厳がある。

この世界はあれか。美男美女しかいないのか。いやいや、少なくとも外にいた住人は普通だった。もし異世界人じゃないとしても、俺の居場所は確実に「この建物の外」だな。

俺は萎縮しつつ長老の前に立った。すると、

「そんなに異世界へ行きたいというからには、なにか深いお考えが
おありなのでしょうが、思いなおされてはいかがですか？」

と開口一番に言われた。

敬語にゲンナリした。これは、なんちゃらブレイカー前提だから
なのだろう。もう、あれだ。本物さんが現れるまで俺への誤解はと
けないものとしよう。相手を納得させるだけの材料がなかったら、
徒労に終わるし。

俺は背筋をのばし、もつともらしく答えることにした。

「俺の決意は変わりません」

「おいおい、長老がああ言うてんだから、もう少し考える」

クレイが口出した。「返してやる」と言いながら、内心は返し
たくなかったようだ。だが俺は帰りたい。自分の気持ちはハッキリ
伝えよう。

気合い入れてクレイの意見を拒否しようとしたところ、さきに長
老が発言した。

「こら、トイチ様に対して、なんとという口の利き方だ」

クレイは笑いながら肩をすくめた。

「そりゃどーも。なにしろ教養がないもので。しかしトイチ様のこ
とは尊敬しておりますよ〜？」

長老は沈痛な面持ちで、ため息ついた。

「これは粗雑だが心の正しい男です。許してやってください」

俺はあせって、首を横にふった。

「いや、俺のほうが年下だし、別に気にしません」

「そうですね。さすが、お心が広い」

「い、いや……」

「で、お気持ちは変わりませんか」

「は、はい」

「わかりました」

長老はうなずき、手にしていた杖をかざした。持ち手の部分に王冠の形をした宝飾品がついている、金色の立派な杖だ。杖は黒い光を集め、放つ。

俺は目を閉じた。

見覚えのある通りに立っていた。通っていた高校の近くだ。書店があつて、ファミレスがある。夕焼け空の下。人通りはまばら。

誰にも見られてなかっただろうな、おい。返すなら家にしてほしかったが、つながっている場所が違うのだろうか。それとも使い手の意思の相違か、はたまた杖の性能か。

とにかく「帰って来た〜！」と歓喜の叫び声を上げたいところだが、まっさきにマントをはずした。こんな浮いた格好で歩いて帰るなんて、冗談じゃない。

マントをたたんで小脇にかかえ、俺は猛ダッシュで家に帰った。

住み慣れた家。使い慣れた部屋。間違いなく元の世界だと確認して安堵のため息をつき、さっそく着替えた。クレイに買ってもらった服は、申し訳ないが、衣装ケースの奥で永遠に眠ってもらおう。ブーツは置き場がないので、とりあえずベッドの下につっこんだ。

あとはケータイで日付を確認。大丈夫。二日しか経っていない。あさってからは、いよいよ大学生活がはじまる。別にないもないだろうが、それでいいのだ。なにこともないのが幸福の基本だ。

こうして俺の日常は戻ってきた。いま平凡に大学へ通っている。ただ少し変化があった。街人のシカトにあわなくなったのだ。コンビニでも待たされず、同じ大学に通う者たちからも普通に挨拶される。いい変化だ。

というか、これが真の平凡だろう。平凡平凡いながら、非常識な日々が続きすぎてマヒしていたぜ。アブネーな。

まあ、それは置いて。

変化はまだある。母が週末にはメシを作って待っているようになったのだ。それにもない、父も上司や同僚の誘いを断って家に帰るようになった。両親と食卓を囲む機会が増えたのだ。

母は言う。

「あなたを大学にやろうと思って、母さん、ずっと仕事がんばってきたけど、お休み増やしてもらったことになったの。こうやって家のこともできる余裕を持たなくちゃダメだと思って」

泣きそうになった。やっぱり親は親だ。無関心なように見えて、実は俺のことを第一に考えていたのだ。異世界で情緒不安定になっていたとはいえ、少しでも親の愛を疑ったことが恥ずかしい。

そうしてみると、ほんの一日か二日の出来事だったが、あれはい経験だったに違いない。これまで親や街に対して怠っていた不満がいかにちっぽけだったのか、よくわかった。なので、これまでどおりでも文句は言わないつもりだったが??その状況は見違えるように改善されていた。うれしい誤算だ。

学食と一緒にメシ食う仲間もできたし、ゲーム機も買った。それだってちっぽけだが、俺の器にあった喜びだ。ずっと望んできた真の平和だった。

それから、五月、六月、七月と、月日はあたりまえに過ぎた。中二の秋からこっち、自分の身に起きていたことが嘘のようだ。

夏休みには自動車学校に通う。免許を取ったら、数人の友達とレ

ンタカーでキャンプに行く予定だ。無論その合間にも、海行ったり、カラオケしたり、合コンしたりと、イベントめじろおしだ。

こんな楽しい人生が待っていてもとは思っていなかっただけに、俺はかなり、浮き足立っていた。ちよっと調子に乗っていたかも知れない。バイトして小銭を貯め、少しリッチな気分になったのも良くなかった。

なんにしても、異世界のことを記憶から葬り去ろうとしていたことで、バチが当たったのかも知れない。まもなく夏休み突入というその日。

悪夢は再び、やって来た。

カルテットによる序曲（前書き）

いずれ改稿することになりそうですが、とりあえず投稿させていた
だきました。お粗末ですが、どうぞヨロシク。

カルテットによる序曲

いつものように大学へ足を運ぶと、門前に人だかりができていた。事故か事件でもあったのかと、人ごみをかきわけ中へ進む？？と、それは「いた」。俺は瞬時に凍りついた。そう、「いた」のは連中だ。

一、二、三、四？？きつちり四人。ワン、ツー、スリー、フォー、やっぱり四人。イー、アール、サン、スー……もういいだろう。

周囲のささやきに注意深く耳をかたむけると、四人そろって我が校に編入してきたということらしかった。

T大から、桜井享。

エスカレーター式の私立校から、佐藤海地、真部李幸、坂本里奈。なにがあればそんなことになるのか、よくわからない。せつかくいい大学に……って、ヤツらにこっちの大学の善し悪しなど関係ないか。とにかく門前は、イケメン三人と美女一人の、異様にめだつ四人組のせいで混み合っていたのだった。

いつとき事態を受け入れきれず茫然としてると、沢垣さわがきひろしが寄ってきた。大学で親しくなった先輩で、現在二十歳だ。容姿も内容も究極のフツメンで、俺にふさわしい友人である。先輩はうれしそうにして、耳打ちした。

「あの最強トリオと新学期から一緒だぜ！ スゲーな。なんだか鼻が高いぜ。あのもう一人、誰だろう。新メンバーかな？ T大から来たって噂だぜ？ トリオ解散してカルテットにでもなるのかな？

へへへ」

なにをのんきなことを言っている。あれは異星人だぞ。間違っても日本人じゃないし、たぶん地球人ですらない。異世界の定義がわからないから断言はできないけどな。そして内二名は、ああやって髪を黒くして日本人っぽくしているが、本当は金髪に銀髪だぞ。メダルならオリンピック優勝だ。

こうしてはおれん。逃げよう。なるべく目にかからないように。いや待てよ。なんで逃げなくちゃならないんだ。俺はもう関係ないはず。じゃあアイツら、どうしてここに？ この大学に本物が紛れていたとかいうパターンか？

……ウゼーな。とっとと連れて帰れ。そして目の前から消えろ。

憎しみを込めて祈っていると、桜井と目が合った。ヤツはニツと笑い、怒り心頭な目つきでズカズカと迫ってきた。

「まいったよ。まんまと騙された。今度こそ食らいついて離れないから、覚悟しろ」

「な、なにっ」

俺が驚くそばから、佐藤海地も寄ってきた。

「王子だからって、口の利き方が横柄すぎるぞ。トイチ様をなんだと心得る」

「フレンドリーに接するのがミソなんだ」

「ミソを明かしてどうする」

「俺がリードしすぎているから、フェアにしてやったんだろ？」

「ふん。おごり高ぶりも、たいがいにしる」

「なんだと、こら。国外追放するぞ」

「やってみろ。城から追い出されないうちにな」

……なんだコイツら。一緒に転校してきたくせに仲悪いな。いがみ合ったのは最初のアレだけかと思ったら、ガチで犬猿の仲かよ。しかしだからといって、公衆の面前でケンカはよくないな。しかも、なんか俺のせいみたいな流れだし。断っておくが俺は無関係だぞ、みんなの衆。いや、その前に台詞がさうとうオカシイ。誰か突っ込め。だが二人はお構いなしに言い争った。

「残念ながら、俺が王位を継承できない場合は、妹が継承する。妹は優しいから、俺を追い出したりしないんだ」

「では今からすぐに放棄して王女にゆずるといい。そのほうが世のためだ」

「言わせておけば言いたい放題。たかが三銃士のくせに」

「ただ生まれただけで王子になったのと、血と汗と涙の努力をして三銃士の地位を得たのでは、どちらが素晴らしいかな？」

「俺がそのように生を受けたのは、ふさわしいからだ」

あー言えばこー言う。尽きそうもない罵り合いに、俺はイライラして拳をにぎり、声を張り上げた。

「ストープ！」

すると周囲まで止まった。とたんに深閑として空気が張り詰める。かえって俺のほうが目天してしまい、背中に嫌な汗をかいた。

なんでこうなるんだ！

俺は腕を震わせつつ、ささやかながら抗議することにした。

「お、おまえらなー、もう俺のことは放つといてくれよっ。なんなんだ、いったい」

「なんだとおっしゃられましても、あなたこそ、どうしてあんな嘘を？」

佐藤が言うことに、俺は眉をしかめた。

「嘘？」

「人違いだと」

「人違いだろ？」

「妖精の粉をつけなかった、という情報はすでに入手済みです。これ以上、言い逃れはできませんよ？」

「ぶほっ！」と俺はむせた。「クレーイー！」と心の中で絶叫したことは言うまでもない。チクルとは、なにごとだ。救世主としてあるまじき行為じゃないか、と。

いやしかし、まだクレイと決まったわけじゃない。俺は気を落ち着けて、再び佐藤に向いた。

「え、えーと、その情報は誰から？」

「保安官」

「保安官？」

「クレイ・ソウル保安官」

「ゲホゲホッ！」

今度はむせるどころか咳きこんだ。

クレーイー！ やっぱオマエか！ 保安官だったのか！ 学校行かなくてもなれるのか！

にしても、学歴関係なく実力さえあれば認められるというのは大賛成な気もするが、そうすると俺はますます隅へ追いやられるタイプだ。よかった。こっちに帰って来て。とりあえずチクツたことは大目に見よう。なにしろ返してくれた恩人だからな。心を広く持つのだ、河波斗一。

「そ、そそ、それで、俺をどうするつもりだ」

心の広さうんぬんとは関係なく、不安に揺れながら尋ねると、佐藤がニコリ。桜井がニコリ。その背後で里奈と真部もニコリと笑った。

「どこへなりとも、おともいたします。まずは鞆をお持ちしましよ
うか」

と佐藤。

「バカヤロウ。鞆持ちは俺がすると決まっているんだ」

と桜井。

「いやいや、トイチ様の貴重品は、僕が責任を持ってお預かりいたします」

と真部。

「じゃ、私は手をつないで歩こうかしら」

と里奈。

里奈の言葉だけは尋常じゃなく嬉しいが、待て。おかしな発言しないでくれ。見る、先輩を。目を丸めて硬直している。そして周囲は恐れおののきつつ、状況を見守っている。健全な学生が通う大学とは思えん光景だ。どうしてくれる。平凡で幸せだった、俺の学生生活。

ハッキリ言ってブチ切れた。ゆえに、低めの声でボソツとつぶやいた。

「鞆は自分で持つし、誰とも手をつながない。俺はおまえたちを心

の底から信用していない」

トリオ改め、カルテットは石になった。

「信用???していただいてないのですか?」

「あつたりまえだろ! あんな森に置き去りにしやがって。いかに自分たちのことしか考えてないか、少しは気づけ! 氷の入った桶に頭つつこんで反省しろ!」

力のかぎり怒鳴ってやった。俺にしては上出来だ。が……

カルテットは啞然とし、悲しげに顔をゆがませた。そして次の瞬間、驚くべき行動に出た。

「申し訳ありませんでした!」

と叫んで、いつせいに土下座!

俺は一転、青ざめた。そんなことをされたら、また取り巻きにボコられるかも知れないじゃないか。コイツらが勝手にやってることなのに。ひよつとして確信犯? なんにせよ俺は悪くない……と思う。そうだ、悪くない。暴力なんか屈するものか。

俺は気合いを入れなおした。

「謝りやすむって問題じゃない。こっちは死にかけたんだぞ?」

言ってやった。そうそう。ゴメンですめば警察も保安官もいらないのだ。

「死にかけた!?!」

カルテットは驚いた様子で、顔を上げた。俺は気圧されて後ずさった。イケメン三人と美少女一人が両膝ついた姿勢で目の前に展開していると、俺なんかオーラにのみこまれて消えちやいそうだ。だが「負けない、負けないぞ!」と懸命に自身を鼓舞した。

「お、おう……」

意気込みとは裏腹に、自信なさそうな声が出た。相手もここで引き下がれないのか、もうひと押しだと思ったのか、再びいつせいに頭を下げる。

「誠に申し訳ございません!」

「もうやめないか」と言いたい。おかしいだろ、この絵面。いつの

時代の誰と誰だ。異世界にいるという自覚あるのか、おまえたち。以前のように演技しろ。さも現代日本人であるかのように振るまえ。それとも、なりふり構っていられないほど切羽詰まっているのか？ そう問いたいくらいだった。

だけど人目がある以上、気をつかう。俺まで頭がおかしいと思われたくない。無難な台詞を探した。

「あ、あの、もういいから、そここだよ。解散しろ解散。講義はじまるし」

うん、まずまずだ。ちょうどチャイムも響いた。

意図を察してくれたのか、カルテットはしぶしぶ立ち上がった。学生らも動揺しながらパラパラと散りはじめる。驚愕のあまり灰になりかけていた先輩も我に返った。先輩は上から下まで俺をひと通り眺めてから、言った。

「な、な、なんだよ。おまえってスゲエ奴だったんだな。ごめんな、いままで。タメ口きいたりして」

いままタメ口だな。だがいいんだ、それで。先輩だろう？ なにを謝る。今の動揺具合なんかも完璧な凡人だ、 沢垣。おまえは実質、俺のタメ以外の何者でもない。

おかげで平和な気持ちに戻れた俺が弁解しようとする、佐藤が言った。

「トイチ様のお世話は、これからは我々がする。ご苦労だったな。感謝しよう」

な、なに勝手に引導わたししてんだ！

が、先輩は佐藤に「感謝」されたことで、すっかり有頂天になっていた。さすが地元民。弱いな。あんな上から目線の感謝、俺なら唾つけて踏みにじってやるところだが。

さて、その日の夕方。訳もわからず付きまとわれるのは嫌なので、

連中を図書室に誘い、これまでの経緯をザッと聞いてみた。カルテツトは案外たやすく答えたので、まとめておこう。

ヤツらは精霊界というところの住人で、種族はヒューマン。だいたい千年ごとに一人の英雄がエレメンタルブレイカーというヤツから選ばれ、エンブレムをもらうらしい。このエンブレムには世を治める力があるとかないとかで、とにかく実権を握れるもののような。そしてなんととっても最大の魅力は、エレメンタルブレイカーから四大元素のイチの値の物質を、常に供給されることなんだと。それによって英雄は力と若さを手に入れるんだとか。不老不死みたいなことかな？ よくわからん。

さて、いかなる者であれ英雄に選ばれるには、まず勇者にならないければいけないということで、ヤツらは努力したようだ。多くのライバルを蹴散らし、踏み倒して勇者になった。あとは「最後の試練」さえ乗り越えれば、晴れて英雄である。

試練の場は毎回、エレメンタルブレイカーが選ぶという。いつ選ぶのかというと、前世の死の間際だ。つまり、来世のことをあらかじめ決めてから昇天するんだな。それで今回は地球という星の日本が選ばれた。「イチ」の名を持つ者が有象無象に存在する場所だ。そこから、わずかなヒントをもとに見つけ出した者が勝ち、というわけだ。ところが、これには少し厄介なルールがある。

エレメンタルブレイカーは勇者としての直感で探らねばならず、確信をもってつかまえるまでは直接そうであるかどうかを問うことができないというものだ。「英雄なら人を見極める目もあるはず」というところなのだろう。

俺に言わせりゃ、見つけてもらう気ゼロな気もするが、精霊界の人間はこちらの人間より第六感が鋭かったりするのだろうか。いずれにしても、残念ながら今回の勇者には素質がないようだ。今頃、本物のエレメンタルブレイカーは失望のため息をついていることだろう。

ちなみに、俺が「人違いだ」発言をしたあと、こちらへUターンした連中は、「河波斗一くんは人畜無害な存在だ。我々にとっても良き幼なじみである。よってシカトや暴力など言語道断。普通に接してやってくれ」と宣言したそうだ。

なるほど。フォローはしてくれていたのか。帰って来たあとの生活が順調だったわけだ。ちよつと異常な宣言だが、連中のすることを奇異に思うやつなどいない変な街だから、よしとしよう。その前に肝心の俺を返してなかったけどな。どこか抜けてる連中だ。

ん？ 待てよ。宣言って、どんなふうにやったんだ？ 街頭演説風だったら、俺はもう恥ずかしくて街を歩けないぞ。

なにげに連中の顔を眺めてみた。しかし、どういうわけか嬉しそうに顔をほころばせるので、とっさに目を背けた。

なんだろう、この空気。

とりあえず聞きたいことは聞いた。俺は座っていたイスから立ち上がり、鞆を肩にかけた。その様子に四人の視線が突き刺さった。俺は座って話を聞いていたが、連中は俺の前に整列し、起立している状態で話をしていたので、視線は下向きから上へと移動した。礼儀を重んじての体勢だったのだろうが、かえって睨みつけられたように、おっかない。

「鞆はお持ちいたします」

またしても佐藤が言う。だが俺は無視した。

「事情を聞けば聞くほど、俺じゃない。もつとよく捜せよ」
すると真部が反論した。

「我々は死にものぐるいで捜しました！ それでも、どうしても、あなたしか該当しないのです」

「違うって。俺がそう自覚してんだから、違うよ」

「では違うという証拠を見せてください。我々が納得いくように」

俺は、なかば啞然として真部を見た。「間違っていることの証明」なんて、どうやればいい。少なくとも俺の中では証明できている。だって違うんだから。心を形にして表せるものなら表したいものだ。

妖精の粉がつけば良かったのか？　じつは名前が違ったとか？

ありえない。だいたい、なにをもってエレメンタルブレイカーなのか、俺は知らない。イチの値の四大元素とやらを精製できなきやいののか？　わざとできないフリをしていると思われるのかオチだ。というて、ほかに違うという決定的な証拠を突きつけるすべもない。

俺は困ったあげく、

「とにかく、俺は違うから」

と言い捨て、急いで図書室を出た。

結局、夏休みに突入するまで、似たようなやりとりが何度も続いた。かたくなに確信している連中といると、違うという自信が削がれていきそうで怖い。そんな恐怖心を振り払うように、「違うんだ！」と叫んでみたところで、胸中の真実はなかなか相手に届かないものだ。

ああ、俺がエレメンタルブレイカーじゃないと証明するものが欲しい。本物が出てきてくれるのが一番でっとり早いが、向こうからはアプローチしないルールとなると、期待薄だ。まったく妙なゲームをおっぴじめたものだ。そんな陳腐なことをしなけりゃ英雄一人定められないのか、エレメンタルブレイカーさんよ。

だが、嘆いても喚いても事態は変わらず、いよいよ夏休みがはじまった。明日からしばらく教習所通いだが、憂うつで身が入りそうもない。キャンプはいまのところ、ふいにされてはいないが、あの影響力がある四人がいては、ドタキャンも覚悟しておかなければならない。

俺は部屋の窓から、灼熱の光を降り注ぐ太陽と、眩しいくらいにブルーな空を、忌々しげに眺めた。

オール・バイ・マイセルフ（前書き）

うーん。とりあえず校正にくたびれたので、あちこち綻びがあっても無視して載せます。ごめんなさい。

オール・バイ・マイセルフ

いったい誰がこんなことになるかと予想しただろう。しなかったのは俺だけか。教習所に通おうとする第一日目から、玄関先にカルテット。どうやら「お迎え」というやつらしいが、いいかげんにしてもらいたい。

母は朝からテンション高めだ。もうすっかり乙女に戻ってキヤーキヤー言っている。

「まあ！ どうぞお上がりになって！ お茶でもいかが？」
そんなことを口走りながら、俺の腕をこっそり突ついた。

「なーに？ いつのまにお友達になったの？ ちっとも母さんに言わないんだから。あんたも隅に置けないわね！」

ふっ、隅に置けないのはアンタだ、母さん。息子と同年の男どもに色目使わないでくれ。ま、一人は女の子だけど。

里奈の顔を見ると、彼女はちょこつと首をかたむけてニコツと笑った。

ま、眩しい。かわいいなチクショー。作り笑いだとわかっていても、気持ちがグラグラ揺れる。彼女が勇者だなんて、とても信じられない。しかしエンブレム獲得のため多くの強者と闘い、勝ち残ってきたんだよな。英雄に選ばれるためなら、気のない男にだって愛想よくするってわけだ。

うーん。わかつちやいるけど、顔がにやけそうになる。エンブレムをやるかどうかという話とこれは別物だ。そもそも俺は無関係だし。どうせ俺がそれじゃないと分かったら手の平返したように無視するんだろう。だったら今は笑顔のサービスくらい受けてもいい。迷惑してるんだし。

俺は無言で靴をはき、一人でさっさと玄関を出ようとした。その俺を、母が慌てて呼び止めた。

「あ、斗ー！ これこれ！」

ふり向くと、母の手に長形四号の茶封筒がヒラヒラしていた。

「なんだよ」

「住民票。入校手続きにいるって言ってたじゃない」

「あ、そっか」

「落とさないでよね。それだって三百円よ」

「セコイ！」

俺は封筒を肩かけ鞆にしまい、「行つてきます」と言つて玄関を開けようとノブに手を伸ばした。だが真部に先を越された。彼はスマートにドアを開け、「どうぞ」と笑顔。おまえは銃士より執事向きだな、真部。

その後カルテットは母に向かつて「では息子さんをお預かりします」と頭を下げ、当然のようにして俺とともに教習所へ向かったのだった。

教習所へ向かう道中。カルテットが後ろからゾロゾロついてくるのを疎ましく思いながらも、俺はふと、住民票が気になった。正確に言えば、住民票より情報量のある戸籍謄本が気になったのだ。

めつたに必要としないから見たことはないのだが、あつちは出生した場所や両親との続柄が明確に記載されているはずだ。それなら自分や両親の謄本を取つて祖父母くらいからの家系を明らかにすれば、俺が間違いなく地球人だと証明されるんじゃないだろうか……なんて。

地球人の身体を介して転生したとか言われたらおしまいだが、してみる価値はある。というのも、桜井の妹が精霊界のヒューマンだと判明しているからだ。ヤツが後を継がなきゃ妹が継ぐつてことは、そつだ。なら、こつちに来ている両親もおそらく精霊界のヒューマンだろう。三銃士の家族構成については謎だが、奴らの両親だつて十中八九、精霊界のヒューマンだと思う。だつたら俺の両親が精霊

界のヒューマンじゃないと証明すればいいんだ。そうすりゃ俺も自動的に地球人。エレメンタルブレイカーじゃないと証明できる。

もつとも、あいつらが地球で生活するにあたって、そのへんの身分証明をどうやってているのか不明だが？戸籍制度のない国から日本国籍取れば、どうにかならないこともない。

よっしゃ、解決の糸口が見えてきたぞ。

つか、桜井。おまえんち王家だろ。城開けっ放しでいいのかよ。

「ごちゃごちゃ考えている間に教習所に着いた。中へ入ると、入校手続きで並んでいた列がサーツと開いて道を作った。」

モーゼ！

『モーゼ』っつーのは、エジプトのファラオに紅海まで追いつめられたヘブライ人を救済するため、杖をかざして海の水を割り、道を作ったという伝説で有名な、旧約聖書の登場人物だ。

「おや、まだ誰も並んでいませんでしたね。運の良いことで。さっそく手続きしてしましましょう」

さわやかに言っただけなのは真部だ。俺は虫酸が走るような思いでふり返った。

「それ本気で言ってるのか。俺、割り込む趣味はねえんだけど」

「割り込みだなんて人聞きの悪い。みなさん快く譲ってくださいっただんですよ」

真部の笑顔は詐欺師のようだ。俺はウンザリした。

「やっぱ並んでたのは見てたんじゃねえか」

「細かいことは言いつこなしです。さあ、手続きを」

「……わかったよ」

出だしがコレだから、すでに察しはついてたが、教習所でのVIP待遇は凄まじかった。この調子だと、どこ行ってもこんななんだろう。気分がいいのか悪いのか。俺はとにかく普通のことを望んでいたから、カルテットの差し金による異常待遇は眉間にしわ寄せも

のだった。

こんな俺にへりくだってまでカルテットに良く思われたいか、街人よ。俺も一時はそんな時期があったから理解できないこともないが、本性を見たあとなので納得がいかない。

どっかの皇太子でも迎え入れるような調子の入校案内やら何やらが終わったのは、十二時ジャストだ。肩が凝った。特別に用意されたらしい教習所内の食堂の席で、俺は向かい合うカルテットを順に眺め、首をかしげた。

「どうしてこの街の住人は、おまえ達なんかをもてはやすんだろう」
その席はセパレータで区切られている。座っているのは背もたれがあるダイニング用のイス。テーブルも木製で光沢がある。不自然なくらい新品だ。カルテットが事前に連絡して用意させたに違いない。そんな威力を行使できることが、俺には信じられないのだ。

カルテットは視線を交わしあい、皮肉げに笑った。

「勇者は英雄に選ばれるだけの素質を持ちます。英雄には民を惹き付ける魅力が備わるものです。そこから放たれるオーラによって、民は自然と憧れ、従うのです。地球人は精霊界の者よりオーラの影響を受けやすいようです」

説明をくれたのは佐藤だ。俺は唸って腕を組んだ。

確かにコイツらが放つ存在感は半端じゃないが、精霊界が考える勇者像に大きな不信感が募る。地球人が想像するソレとは違うんだろうか。

俺が頭を悩ませていると、桜井が口をはさんだ。

「おまえはちつとも影響されないよな」

このひと言は、だいぶ意味深だった。俺がキョトンとして桜井を見ると、やつはニヤリと笑った。

「左右されないのはエレメンタルブレイカーだけ。これは常識だぜ？」

「ぐおー！　なんだそれなんだそれなんだそれ！　俺がエレメンタルブレイカーだと疑える理由がそんなところにもあったのか！　く

そつ。最初に言っつけS王子！俺だつて昔はちよつと憧れていたんだ。そうと知っていれば、その旨を伝えまくつたのに。いまさら言つたつて信じてもらえねえじゃねえか！

それでも俺は、頭皮に大量の汗をかきつつ必死に言い訳を探した。「……い、いくら影響されやすいつつても、本性見れば誰だつて熱冷めるつて」

おお！結構うまいことフォローできた。

だが桜井はまたも不敵に笑んだ。

「普通はどんな醜態をみせても美化される。勇者や英雄の特権だ。それが通用しないなんて、エレメンタルブレイカーだと言っているのも同然のことだぜ」

俺は大きく目を見開いて桜井を見た。人生で初めて「ギャフン」と言つたかも知れない。

桜井はテーブルに腕をついて身を乗り出した。

「いいかげん白状しろ」

なるほど。ここはちよつと見てくれのいい取り調べ室だつたんだな。じゃあセパレーターで区切らないとな。あとは音声変えれば完璧だ？？て、冗談じゃない！

俺は頬を引きつらせながら、無理に笑顔を作つた。

「腹へつたな。注文したやつ、まだかな？」

強引なそらし方だつたが、カルテットは慌てて席を立つた。そしてまもなくトレーに載せたランチを持って戻つた。

「申し訳ありません。気がつきませんで」

真部が俺の分を目の前に置いて謝つた。ほか三名は自分らの分を手際よくテーブルに置いていった。

「冷めないうちに、いただきましょう」

佐藤が言つて、みな席についた。俺はうなずき、黙々と食べた。

少しは開き直らないとな。勝手にそうだと決めつけているほうが悪いんだし。俺は何度も「違う」と断つてるんだし。これまでの腹いせに、こき使おう。

それにしても、英雄オーラパワーときたか。都合のいい力だなあ、おい。どんなことしてもカツコ良く映るなんて、ふざけてる。どうせなら俺もそつちのがいいぜ。ライバルというには雲泥の差があるが、ハタからみてカツコ良けりゃ負け犬でもいいさ。

食事が終わると、また真部が素早く動いて、食器類を下げてくれた。俺の世話をやく姿すらサマになっているのは、心底？執事？向きなのか、やっぱり英雄オーラの力なのか。

エレメンタルブレイカーだと勘違いされているだけの俺には、なんの力があるんだろう。何に向いていて、どうすれば最善なのか。……もつとも今は、コイツらから逃れることが最善だと思うが、相むずかしそうである。

俺はイスから立ち上がり、セパレータで区切られた空間から出た。そこで携帯からメール着信音が聞こえたので、取り出して見た。先輩の沢垣からだ。

「これから井上たちとカラオケ行くけど、来るか？ 来るんなら、いつものところだからヨロシク？」

俺は急いで返信した。そしてカルテットに言った。

「俺、これから先輩と会うから、ついてくんよ」

だが案の定、佐藤が文句を返した。

「そんな。我々もお伴します。決してお邪魔はいたしませんから」
「いやいや。おまえたちは「いる」だけで邪魔だっつーの。わかってねえな。」

「ついて来たりしたら今後いっさい口利かないぞ」

無性に腹が立って言い捨てると、さすがに四人とも沈黙した。俺は有無を言わせない勢いで踵を返し、教習所をあとにした。

教習所を出た足で俺が向かったのはカラオケルームじゃない。市

役所だ。自分の戸籍謄本を取りに行ったのだ。もちろんカラオケへは行くつもりだが、思い立ったら吉日である。これ以上カルテットに縛られてはいけない。こんなことが日常茶飯事では、いざつて時に普通の生活に戻れなくなる。一刻も早く「俺はエレメンタルブレイカーじゃない」と突きつけられる証拠が必要だ。

そうとも。この時の俺はただ、平凡で自由な青春を満喫したい一心で、紙切れ一枚にすがっていた。それなのに……

戸籍謄本と睨めっこしながら市役所を出た俺は、確実に青ざめていたと思う。紙面にありえない文字が踊っていたためだ。

『養子縁組日』平成 年 月 日

『養父・河波正』

かわなみただし

『養母・河波良子』

かわなみりよこ

ちょっと待ってくれ。誰でもいいから「これは何かの間違いだ」と言ってくれ。俺が証明したかったのは、こんなことじゃない。紙を持つ手が震えた。体中の血が沸騰して顔が熱いし、もう泣きたい。

生まれてこのかた、一度も実の親と信じて疑わなかったあの両親が養父母だったなんて、本当にありえないことだ。足元にある確かなものが音を立てて崩れていくような錯覚??めまいを覚える。

俺は「誰」なんだ。

そんな疑惑が胸の奥底から沸き上がった。

俺は書類を鞆へ乱暴に突っ込んで、道路を渡ろうとした。あまりにショックで、周りは見えていなかった。

次の瞬間、耳元で響くブレーキ音にハツとした。トラックの正面が見えた。そして暗転。

ギョツとつむつた目を再び開けると、広い畑の真ん中に突っ立っていた。あたりにはオレンジ色のカボチャがゴロゴロ転がっている。ハッピー・ハロウィン。

そんな単語が浮かんだりしたが、陽気にはなれなかった。シヨックを受けている真つ最中だし、この唐突なシチュエーションに嫌な予感がする。

俺が見てないところでカルテットが杖をふつたのだろうか。ありえるな。なんだかんだ言いながら、俺を付け回していたに違いない。フェアリーの長老に頼めば帰ることができるかも知った今では、車に轢かれるよりマシだと思えるが、あんまりナイスな機転じゃないよな。助けるなら普通に助けてほしかった。

俺はため息ついて、ボチボチ歩いた。畑の向こうに民家が見える。デツカイ平屋だ。畑の持ち主の家だろう。

どうか話のわかる人間が住んでいますように。
そんなことを祈りながら、歩いて行った。

「すみません。道に迷って困っています。誰かいませんか？」

玄関先に立って、木の戸を叩いた。

よもや物語につきもののワンシーンを現実にやろうとは。しかし、今はそうするしかない状況だ。

「どなた？」

戸の向こうから返事があった。女の子の声だ。ラッキー。厳格なおヤジ声が返ってきたらどうしようかと思っていたが、これは幸先がいい。

「あの、俺、カワナミっていいいます。道を教えてもらえたらと思つて」

戸が少し開いた。その隙間からクルツとした目がのぞいた。栗色の瞳で、髪はストレートの金髪。半分しか見えていないが、十六歳かそこの少女だとわかる。服装は開拓時代のアメリカ人みたいだ。なかなかカワイイ。

「ヒューマン？」

少女の眉がゆがめられた。彼女の耳は尖っている。フェアリーだ。やっぱ俺は運が悪いのかな？　だがフェアリーの長老に用があるんだから、これでいいんだ。

「道を聞きたいだけなんだ。ダメかな？」

なるべく優しい声で問いかけた。少女はスツと戸を開いた。心を許してくれたのかと、俺がホツとしたのも束の間。

ゴツ……！　と背後から鈍い音がした。それは俺の頭が棒のようなもので打たれた音だ。俺はふらつき、地に手をついた。

「この野郎！　なにしに來やがった！」

若い男の声が出た。しかし俺には振り向く余裕もなにもありやしなかった。頭部の痛みを必死に堪えていたからだ。

「兄さん！　この人は道を尋ねに來ただけよ！」

少女の声が響く。すると男が言い返した。

「バカだな！　ヒューマンにロクな奴なんていないんだよ！　信じるんじゃない！」

同感だ。俺が知る限りの精霊界のヒューマンは、確かにロクなものじゃない。

そこへ男の蹴りが腹に入った。この蹴りは最高に利いた。俺は完全に転がって、意識が薄れていくのを感じた。

「ヒドイわ、兄さん！　無抵抗の人に乱暴するなんて！　死んじやったらどうするの！？」

「このくらいで死なねえよ。それより鞆、没収してどっか隠しとけ」「どうして？」

「人質みたいなもんだよ。返して欲しかったら言うこと聞くだろ」

「聞かなかつたら？」

「そんなときゃそんな時さ」

目を開けると木造の屋根と梁が見えた。壁は白い漆喰。身体はベツドに横たわっている。頭はズキズキするし、腹には鈍い痛みが走る。

「ゴメンなさい」

不意に声がして、横を向いた。さきほどの少女が、タオルを絞って額に乗せてくれた。どうやら俺は気絶していたらしい。

「ヒューマンなんかに謝るな。こんなところ、うるついているのが悪いんだ」

少女の後ろから声が出た。俺を殴った男だ。どんなヤツに殴られたのだろうかと思つて視線を送ると、少年だったので驚いた。茶髪に栗色の瞳。少女とよく似た顔立ち。十七くらいだろうか。

相当ヒューマンに偏見があるようだが、なにがあつた少年よ。

少年は妹を押しつけ、ズイツと寄つてきた。

「保安官を呼んだ。けどここは辺境にある。来るまでに最低二週間かかるから、それまでは、みっちり働いてもらうからな。持ち物もこつちが預かる。文句は言わせないぞ」

ああ、例の人質だな。悪いが、たいしたものが入っていないから質にはならないんだ。教本と問題集とペン、それにわずかな金と戸籍謄本?? っつそ鞆ごと燃やして灰にしてくれ。

お、それより保安官呼んでくれたのか。ありがとう。お礼にいくらでも労働いたします。

俺は起き上がれないながらも、頭を下げた。

「あ、ありがとう」

その行動が奇妙だったのか、少年は変な顔をしてそっぽを向いた。「仕事は明日からだ。服はオレのので間に合いそうだから用意してる。そんな変な服で外に出るなよ、いいな?」

またしても拒否られたか、プリントTシャツ。ボトムスはカーゴパンツでこちら寄りのデザインだからセーフだろうけど。

翌日。

俺はTシャツを脱いで、用意された服を着た。紺のノースリーブのハイネックだ。ベージュ色のマントもつけた。ここはフェアリー自治区内らしい。『フェアリーが住んでいる』『イコール』『フェアリー自治区』ではないだろうと思っていたが、案外イコールなのかも知れない。

軽めの朝食をすませたあと、俺は少年と一緒にカボチャ畑に出た。「この畑にあるヤツ、全部収穫な。がんばれよ」

少年は無造作に言った。「がんばれよ」の部分に丸投げ的空氣を感じる。

「え？ 一人で？」

思わず聞きただすと、ギロツと睨まれた。

「文句あんのか？」

「いや、ないけど」

俺は遠くを見渡した。広い畑だ。向こうの端が霞んで見える。一日二日では終わりそうもない。こりや骨が折れそうだ。グズグズしていられそうもないので、さっそく収穫にかかろう。

「これは食用？ それともランタン？」

ハサミでパチンと茎を切りながら尋ねると、少年は片眉をつり上げた。

「家畜のエサだ」

かーちーく？ カボチャ食う家畜って、どんなんだ？ なんかいるだろうけど、思いつかないな。

「自分らは食べないのか？」

人畜兼用かと思つて聞くと、少年は憤慨した。

「なんでだよ！ バカにしてんのか！」

「や、してないけど。そっか、家畜オンリーの食料なのか。なんか結構つまそうなのに、食わないのはもったいないな」

「も、もつたいないって……」

少年は戸惑い、「うえっ」というような表情を浮かべた。が、急に意地悪そうに笑った。

「じゃあ、おまえ食ってみるよ。どうせ分けてやる食料なんかないんだし、それですむなら、こつちも助かる」

おっと、そうきたか。でも大丈夫。カボチャの調理法は心得ている。両親不在の日が多くて、たまに自炊してたしな。

「わかった。そうする。あ、でも鍋とか包丁とか調味料は貸してくれよな」

あっさりと受け入れた俺に、少年は目を丸め、たじろいだ。

「変なヤツ」

少年は言って踵を返し、家の中に入っていった。

気持ちにはわからないでもない。「家畜のエサを食う」ということが、どんな侮辱にあたるかくらい想像がつく。俺の「食べないのか」発言に、少年も肩を怒らせた。しかし俺にはカボチャにしか見えないうし、こちらの常識などどうでもいいことだ。今はこの時をしのいで地球に帰る。それしか考えられない。食い物なんて食えたらいいんだ。

その晩さっそく調理場を借りて、煮付けを作った。醤油つばいものがあつたからだ。ダシと醤油があれば、たいていの日本人は生きてゆける。あとは肝心のカボチャだが……

ひと口食って、俺は感動した。絶品栗カボチャだったからだ。

「は、うまい！」

そんな俺を見て、兄妹は仰天した。

「そんなに美味しい？」

と少女が聞く。俺は大きくうなずいた。

「うまいよ？　なんで？」

「だって、それは普通、そのまま砕いて家畜のエサになるのよ？　そんなふうに調理して食べるなんて、不思議」

「俺が生まれ育ったところでは普通だけど」

「え？ そんなに貧しいの？ ヒューマンの領土って、どこも豊かだと思ってたわ」

なんだその引っかかる台詞。ヒューマンの領土はどこも豊か？

「フェアリー自治区は豊かじゃないのか？」

素朴な疑問をぶつけると、兄が憤って怒鳴った。

「豊かな土地は全部ヒューマンが奪ってったじゃないか！ ここだって、作物が育つまで肥やすのに何百年費やしたか……！」

うおーっ！ なんか凄惨な歴史が見え隠れするぞ。まずーい！

しかし、そらしてしまつのはもつとヤバイ気がする。慎重になろう。

「フェ、フェアリーって、虐げられてんのか？」

「そうだよ！ 昔ほどじゃないけど。てか、虐げてるほうは自覚ないのか！」

「お、俺はそんなつもりないよ。どうしてそうなってるのか知らないし」

「え？ 知らないのか？」

「勉強不足で」

「ふん、どうだか。自分たちに都合の悪い歴史は伝えられてないんじゃないか？ ヒューマンのやりそうなことだぜ」

ひ、ひねくれてる。少年が口にする台詞にしては辛辣だ。これは、よほどのことがあったに違いない。そもそも学校にも行かないでカボチャ畑を管理していること自体おかしい。どうなってんだ、この世界。十五くらいで成人とか？ だったら俺、スゲエ大人じゃん。プレッシャーだなあ。

俺は深呼吸した。二度あることは三度あると言っからな。こうたびたび飛ばされるのであれば、多少はこちらの常識も学んでおかないといけないことに気がついた。だから思い切って聞くことにした。「じゃあ、そういうことにしておいて、教えてもらえないかな？」

その夜、俺は眠れなかった。彼らの歴史は、前に見た本の挿絵が示すものと同じだったからだ。

フェアリーは昔、とても小さかったらしい。地球人が想像しているとおりの姿だったのだ。魔力を持ち、自然と共存し、豊かに幸せに暮らしていた。だが木こりに見つかってしまっただけから、世界が一変したという。木こり「ヒューマン」は、フェアリーをカゴに閉じ込め、彼らの力をいのように使ったのだ。

フェアリーは逃れられなかった。ヒューマンが秘宝石を持っていったからだ。精霊界にたつたひとつしかないというこの宝石は、フェアリーを従わせる力があるのだとか。

それでもフェアリーは抗った。ヒューマンに虐げられ、こき使われる毎日に辟易し、反旗をひるがえしたのだ。だがヒューマンは報復とばかりフェアリーの森を焼いた?? たくさんのフェアリーが死んだ。

絶体絶命に追い込まれたフェアリー。そこに現れたのがエレメンタルブレイカーである。ヒューマンでありながらフェアリーの味方だったという人物。彼は強大な力でヒューマンから秘宝石を奪い、エンブレムに封印した。そしてカゴから解き放つため、フェアリーの身体を大きくしたのだ。

彼の強大な力とは、例の『イチの値の四大元素』である。この『イチの値の四大元素』というやつは、万能ともいえる力を発揮するらしい。秘宝石を封印し、フェアリーを大きくしただけではなく、何の価値もない痩せた土地をも蘇らせたのだとか。まあ、さすがに土地は規模がデカイから数百年費やしたらしいが……なるほど。すげえな『イチの値の四大元素』。カルテットも喉から手が出るほど欲しいわけだ。

そんなこんなで、エレメンタルブレイカーが味方について形勢が逆転したフェアリー。だが、いかに味方してくれようとエレメンタ

ルブレイカーはヒューマンだ。彼の同胞に復讐することをためらったフェアリーは、ヒューマンと条約を結ぶことで決着をつけたという。

条約とは、以下のことだ。

『ヒューマンはフェアリーを支配してはならない』

『フェアリーの力を必要とする時は、その資格を持つ者が協力を仰いで借りること』

『資格はフェアリーを支配するエンブレムを手にした者にのみ与えられる』

『エンブレムは心正しきヒューマンにのみ与えられる』

これはフェアリーに害をなさない者という意味だ。ゆえに??

『そのヒューマンは英雄として選ばれる必要がある』

『選ぶ者はフェアリーの救世主・エレメンタルブレイカーのみである』

俺はため息ついて、寝返りを打った。考えれば考えるほど、なんでそんな偉人と間違われているのか、わからないのだ。

それにしても、石を投げ合うほど険悪な仲じゃないと思っていたのは誤解だったな。あの時は保安官がいたし、礼拝堂の前だったから、みんな抑えていたんだ。俺だってフェアリーの立場なら、後ろから頭どつきたくなるもんなあ。やれやれ。

兄妹の世話になってから一週間が過ぎた。この頃になると少し打ち解け、名前を教えてもらえた。兄のほうはティム、妹はローザだ。妖精らしい名前だと勝手に思った。ティムとローザ、なんかメルヘンだ。

飯といえは相変わらずカボチャばかりで少々飽きてきたが、煮付け、バターソテー、コロツケ、グラタンなどなど、がんばればレパ

ートリーはある。

家畜のエサをあれこれアレンジするのが珍しいのか、ティムとローザは新たなメニューが出てくるたびに興味津々で眺めていた。決して口にしようとはしなかったが、「おいしそう」とは言ってくれた。

「このあたりに住んでるのは、君たちだけなのか？」

俺の質問に、ティムとローザは黙ってうなずいた。なんだか、しみりってしまった。十代の若さで兄妹二人、こんな人里離れた場所で暮らしているのが気の毒だったのだ。いくら家がデカくて土地が広くでもなあ。

「そりゃ寂しいし、不便だな。俺が力になれたらいいけど、俺じゃあな。役に立てなくて本当に申し訳ない」

俺が頭を下げると、ティムとローザはまた驚いた。俺がすることに、いちいち驚く二人？？反応が純粹で心洗われるようだ。こんな弟や妹がいたらいいかも知れない。

前略。父さん母さん、養子増やしませんか？

「ヒューマンって、いけ好かないヤツばかりだと思っていたけど、そうでもないんだな」

ティムがそう言ってくれた時は、正直うれしかった。俺が笑うと、ティムもローザも笑った。こういうのを「ふれあい」って言うんだろう。なんだか別れが惜しくなってきた。地球に戻れば、またあのカルテットと付き合わなければならぬ。そう思うと心が荒む。

ふっ、いつそこに住もうかな。いや、それじゃ二人に迷惑か。

この世界のヒューマンってのも嫌だし。スゲエ印象悪いもんな。

そうこうする間に日は過ぎ去り、カボチャの収穫を終えて残った蔓の始末にかかっていると、隣人が訪ねてきた。隣人といつても二キ口先の集落の男だ。役付で定期的にティムとローザの様子を見に

来ているらしかった。幼くはないが子供といえる年頃の兄妹を放つておいては、自治体的にマズイからだろう。

その隣人は俺を見て渋い顔をした。

「保安官に預けるまで、こき使ってるんだ」

ティムは言ったが、隣人は黙って帰り、翌日に大勢の村人を連れてやって来た。俺はひどく嫌な予感がした。

「ごめん。オレ、フォローしたつもりなんだけど」

ティムは動揺して言った。俺は「おまえのせいじゃない」と慰めた。

ティムによると、ヒューマンを殴りたいという衝動はフェアリーに根強くあるらしい。無論、報復は法的に認められていないので公然とはやらない。だが陰に隠れてやる暴力というのは存在するのだ。したがって、こういう辺境の地にヒューマンはやってこないのだという。法の目が届かないからだ。

「ここでヒューマン一人殺したって、ヒューマンに殺されたフェアリーの数には全然届かない」

村人はそう吐き捨てた。

殴りたいだけならカワイイものだ。彼らのそれは殺気だった。俺が感じた恐怖は計り知れない。手に農具を持った男どもに囲まれた時、もう死んだと思った。カボチャ畑で殺害されるとは……妙な気分だが、どう考えても笑い話にはなりそうもない。

じりじりと距離を縮めてくる村人。恐怖で喉がカラカラの俺。そして高らかになるラッパ。

……ラッパ？

「者ども！ 散れ！」

突然の怒号とともに、ラバのようなラクダのような牛のような鹿のような馬に股がった男が、ベージュ色のマントをひるがえし、集団に突っ込んで来た。村人は驚き、慌てふためきながら散る。村人を蹴散らした張本人も相当あせていたようで、飛び降りながらよろめいた。そして俺の前に片膝ついた。

「無事か？」

クレイだった。ラツパはおそらく、パトカーのサイレンと同じような役割のものだろう。その手に固く握られていた。

クレイの急な登場と、間一髪救われたという思いで、俺の頭の中は真っ白だった。だから何を問うでもなく突っ立っていた。するとクレイが俺を見上げて言った。

「おい。こっちは保護されたヒューマンがカワナミだって聞いて、飛んで来たんだぜ。なにか言うことはねえのか」

口の悪さは相変わらずだが、安心した。緊張の糸が切れて、俺は地面にへたりこんでしまった。そしてヘラツと笑った。

「ハハツ、水飲みたい」

これにはクレイも笑った。

「またかよ。いつも喉が渴いてんだな」

クレイは立ち上がり、村人を見据えた。

「トイチ様が水をご所望だ。誰か持ってこい」

今度は村人が縮み上がる番だ。この世界で？イチ？がつく名前は、かなり破壊力がある。

「トイチ様だつて！？　じゃ、コイツが……、いや、この方がエレメンタルブレイカー？　た、大変だ！　こうしちゃおれん」

というわけで、急遽ティムとローザの家に集まった村人は俺に平謝りした。殺そうと思っていたヒューマンがエレメンタルブレイカーだったというので、尋常じゃなく泣きわめき、後悔しながらの土下座である。

俺とクレイはイスに座って、その光景を眺めている。どうしたもんだろう。

ティムとローザはしばらく茫然としていたが、今は部屋の隅っこで、おとなしく正座している。顔を紅潮させ、目をキラキラさせながら。

悪いが、俺は目をそらさせてもらった。羨望の眼差しを向けられ

ることに慣れていないのだ。しかもエレメンタルブレイカーじゃねえし。なんか良心が痛む。だがこの場を無事にやり過ごさねばならないので、当面はエレメンタルブレイカーで通させてもらおう。

「本当に……！ 本当に申し訳ございませんでした！」

ああそつだ。とにかくさつきから、しつこく泣いて謝る村人をどうにかしよう。

「あの、もういいから。それより俺、クレイと話がしたいんだけど」「ははっ！ どうぞ、我々にお構いなく！」

うーん。立ち退いてくれないと「お構いなく」とはいかないんだが、しょうがない。

俺はため息ついて、クレイに向いた。

「長老に頼んで、も一回、戻してもらえませんか」

クレイは真面目な顔で、俺を見据えた。

「それはできない」

「……え？」

「あっちへ行くには、こっちに戻った方法と同じでなきゃならないん？ どういうことだ？」

「え、ええつと、もうちょっと詳しく」

「前は杖の力で戻っただろう？」

「あ、はい」

「今回は道具なしだ。ここへ来る前に念のため長老の力を借りて、どういふ経路で舞い戻ってきたのか確認してきたから、間違いない」

手抜きねえな。さすが実力オンリー保安官。

「それで？」

俺が首をかしげると、クレイはビシツと言った。

「おまえ、自力でこっちへ飛んだんだ。だから、あっちへも自力で行くしか方法はない」

……しばし目が点。そして俺は絶叫した。

「なぬー……！」

オール・バイ・マイセルフ（後書き）

「引き」がマンガとか言わないの！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5395u/>

ヒーローズ・エンブレム

2011年10月11日13時00分発行